

学校の今に寄り添い、教育委員会とともに未来を描く

〔ビューネクスト〕教育委員会版

# VIEWnext

2021 Vol.

全国の  
教育委員会に  
無料で  
お届けしています

# 4

表紙の学校  
東京都

昭島市立  
光華小学校

教育長が語る Leader's View

鹿児島県鹿屋市

新旧のベストミックスで

「グローバル人材」を育成

特集

個別最適な学びとの

往還で深まる

## 協働的な学び

課題整理と提言

國學院大學 教授 田村 学

特別企画

### 遊びを通じて

### 健康的な身体づくりを

山梨大学 理事・副学長 中村和彦

東京都昭島市

データで教育を読む

### 「協働的な学び」の実施状況

# 新しい価値やツールと、経験・伝統との ベストミックスで「グローバル人材」の育成を目指す

鹿児島県 <sup>かのや</sup>鹿屋市教育委員会 教育長 **中野健作**

なかの・けんさく 鹿児島県の公立中学校教諭を経て、鹿児島県教育庁教職員課課長、鹿児島県総合教育センター所長、鹿児島市立伊敷中学校校長、鹿児島市立吉野公民館館長等を歴任。2015年4月から現職。

## 日本や世界の人たちと 競争・共存する力を育む

子どもたちが生きる未来を考えた時、地域的には、少子高齢化や過疎化などの問題があります。一方、世界的には、経済や科学技術などの分野で国家間が競う「競争」と、環境問題や感染症問題などに国際的に協調して取り組む「共存」が求められます。そのような社会状況を踏まえ、本市では、家庭や地域の教育力を高め、郷土を愛し、協力し合うことによる、「未来を担う心豊かでたくましい人づくり」を教育の基本理念に掲げました。

インターネットの利用で、地方からでも世界とつながりやすくなった今日、本市の子どもにも、日本や世界の人たちと肩を並べて競争・共存するための力が必要です。具体的には、自己実現によって賢く豊かに生きる力や、生涯にわたって学び続け、自らを再教育する力です。多様性を理解して順応する力や、英語をツールとして使いこなしてコミュニケーションする力の育成も重視しています。

次世代の教育は、「主体的・対話的

で深い学び」の実現を目指すことと、GIGAスクール構想によるICTの効果的な活用を推進することに、長年にわたり学校や教員が積み上げてきた経験やノウハウを「ベストミックス」することによって、成り立つのではないのでしょうか。無論それは一朝一夕には実現できず、本市も今まさに試行錯誤を重ねているところです。

## 「寺子屋事業」や「学校応援団」で 地域の方とともに子どもを育成

本市の教育の土台となるのは、「小中一貫教育」と「コミュニティ・スクール」です。その体制により、小・中学校間、地域と学校間の協働を深めています。

本市には元々、地域全体で子どもを育む風土があり、学校と地域には強い結びつきがあります。例えば、2016年度に開始した「鹿屋寺子屋事業」では、子どもが放課後に公民館などに集まり、地域住民から勉強や昔ながらの遊びを教わったり、異年齢で学び合ったりしています。学力向上や放課後の居場所づくりを目的と

した活動で、市内に約30か所ある拠点は今後も増やしていく予定です。

また、地域住民が授業でゲスト講師を務めたり、農業や郷土芸能の体験学習等を支援したりする「学校応援団」は、2020年度には全小・中学校で約2,900回実施され、延べ約8,300人の協力を得ました。地域の方々が学校の大きな力となっていることを、心強く思っています。

「親子の20分間読書」運動にも力を入れています。毎日、家庭で子どもが本を音読し、読み終えたら保護者が褒めて、親子で本の内容について話し合う活動です。中学生には、読んだ本を親子で紹介し合うことを推奨しています。市民運動のような形で普及させており、家庭の教育力の向上につなげたいと考えています。

## グローバル人材の育成に向け、 小学1年生から英語教育を実施

世界の人々と競争・共存するためにグローバルに課題を捉えた上で、郷土の魅力を生かしてローカルな課題に挑む「グローバル人材の育成」



も目指しています。そのためには、英語をツールとして使いこなす必要があると考え、2005年度より、教育課程特例校として小学1年生からの英語教育を行ってきました。市内を5ブロックに分けて研究を推進し、その成果を市全体で共有することで、小学校英語に関する指導ノウハウが確立しました。

子どもたちには英語学習への前向きな姿勢が育まれています。英語力の伸びを客観的に把握できていない状況でした。そこで、2021年度より、小学6年生全員に英語のパフォーマンステストを実施し、客観的な評価に基づいて授業改善を図る仕組みを整えました。

さらに、小・中9年間で培った英語力を実際に活用できる場を設けようと、小・中学生が地域に住む外国人に英語で本市の魅力を伝え、もてなす「イングリッシュキャンプ」を、子どもたちが主体となって準備から

行う活動にアップデート中です。授業と連続性のある活動とするために小・中学校の英語のカリキュラムも練り直しており、2022年度から実施予定です。

### 学校に年300回以上訪れ、対話による問題解決を重ねる

コロナ禍を通して改めて痛感したのは、直接会って対話することの大切さです。こと教育においては、顔を合わせながら心を通わせて人間関係を構築することが欠かせません。

本市では、不登校の解消に向けて、全市立小・中学校で「構成的グループエンカウンター」\*を教育課程に年間6時間以上組み込み、推進しています。その成果もあり、人間関係や雰囲気が大きく改善されて、ここ数年間で不登校の児童生徒数が3分の2に減少しました。

学校と教育委員会の関係においても、直接対話することを大切にしています。学校に直接訪問するからこそ現状を把握できると考え、指導主事や私自身の学校訪問を精力的に行ってきました。2021年度は1月末までに8人の指導主事が延べ300回以上、市内全小・中学校を訪問しました。一見負担が大きいと感じるかもしれませんが、実際に顔を合わせて話すと、問題解決が早まったり、お互いが納得できる深い結論に達したりしやすく、長期的に見ると利点の方がはるかに多いと考えています。

そうした関係性を土台に、今後も学校と教育委員会が手を取り合って問題解決を図っていく考えです。チャレンジなくして進展はあり得ません。失敗しても軌道修正をすればよいのです。学校と理想の教育を共有し、少しずつ工夫と改善を重ね、子どもにとってよりよい教育を実現していきます。

#### 鹿児島県鹿屋市 プロフィール



◎大隅半島のほぼ中央に位置し、北部には日本の自然百選に選ばれた高隈山系たかくまが連なり、西部は錦江湾きんこうに面する。年間平均気温が17.6℃という温暖な気候と豊かな自然を生かした農業や畜産業が盛んで、名産はさつま芋も黒豚など。第二次世界大戦中に千人を超える多くの特攻隊員が出撃した地であり、鹿屋航空基地史料館がその歴史を伝える。人口 約10万人 面積 448.15km<sup>2</sup> 市立学校数 小学校23校、中学校12校、高校1校 児童生徒数 約1万人 電話 0994-31-1137 (学校教育課)

\* 集団学習体験(エクササイズ)により心の交流の場を意図的に作り出し、本音と本音の交流による親密な人間関係を構築する活動のこと。

## 3 特集

### 個別最適な学びとの往還で深まる 協働的な学び

#### 4 課題整理と提言

#### 個別学習と協働学習を往還する授業デザインで、 知識を構造化・概念化する「深い学び」に導く

國學院大學 人間開発学部初等教育学科 教授 田村 学

#### 8 事例1 秋田県 大仙市立大曲小学校

#### 「自分で考え、学び合い、振り返る」を1コマの基本に。 探究学習でも小単元で個と集団の学びを繰り返す

#### 12 事例2 福井県 福井市明倫中学校

#### 課題設定や、思考を揺さぶる「第二の発問」で、 個の思考を深め、議論の活性化につなげる

#### 16 事例3 広島県 安芸太田町立加計中学校

#### 知識構成型ジグソー法で行うグループでの 学び合いの繰り返しが、生徒の思考を一層深める

## 20 特別企画

### コロナ禍でも体力・運動能力向上のために 遊びを通じて健康的な身体づくりを

提言 山梨大学理事・副学長 中村和彦

運動と遊びを「楽しむ」ことで、健康的な身体づくりを可能に

実践事例 東京都昭島市 教育委員会、昭島市立光華小学校

ガイドブックを基に、プレイリーダーが遊びの場を支援  
早起き推進で生活習慣を見直し、健康的な身体づくりを実現

表紙の学校

## 連載

### 巻頭 教育長が語る Leader's View

鹿児島県 鹿屋市教育委員会 教育長 中野健作

新しい価値やツールと、経験・伝統とのベストミックスで「グローバル人材」の育成を目指す

### 26 Benesse Report データで教育を読む

#### 小・中学校での「協働的な学び」の実施状況

### 28 フロントランナーに聞く 教育のnext

Web VIEWn-express

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ 常勤理事、ピジャレアルCF 元コーチ  
佐伯夕利子

子どもが主語となる「教えないスキル」で、自立・自律できる力を育む

### 巻末 新しい学びのかたち キーワード解説

思考ツール（シンキングツール）

Web VIEWn-express

上記マークがついている記事は、  
ウェブサイトで関連記事や動画を  
ご覧いただけます

◎ベネッセ教育総合研究所のウェブ  
サイト内の『VIEW n-express』コー  
ナーでは、本誌に関連した記事や動  
画を掲載しています。本誌の該当ペ  
ージに記載しているそれぞれのアクセ  
ス方法をご覧の上、ご利用ください。

◎『VIEW n-express』  
のトップページには、  
右記の2次元コードか  
らアクセスできます。



VIEWnext 教育委員会版は、  
電子ブック、PDFでも  
ご覧いただけます

◎『VIEW next』教育委員会版及び  
『VIEW21』教育委員会版の2020年  
度の号は、電子ブックでご覧いただ  
けます。また、すべての記事（バック  
ナンバーを含む）を、PDFでダウン  
ロードすることもできます。いずれも、  
ベネッセ教育総合研究所のウェブサ  
イト内の『VIEW next』教育委員会版  
からご利用ください。

HOME → 教育情報 → 教育委員会向  
け → バックナンバー

◎ベネッセ教育総合研究所ウェブサイト



<https://berd.benesse.jp>

または

\*本文中のプロフィールはすべて取材時のもの  
です。また、敬称略とさせていただきます。

\*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び  
転載を禁じます。

# 個別最適な学びとの往還で深まる 協働的な学び

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、その重要性が示された「個別最適な学び」と「協働的な学び」。中央教育審議会の2021年1月答申では、「協働的な学び」による成果を「個別最適な学び」に還元して、両者を一体的に充実させている。

本特集では、そうした授業を目指し、個別学習と協働学習を往還しながら子どもたちの学びを深めている探究学習・教科学習の実践を、授業レポートとともに紹介。

本分野において研究・発信を続ける専門家の提言を踏まえながら、子どもたちの「深い学び」につながる「協働的な学び」のあり方について掘り下げていく。



個別学習



往還



協働学習



# 個別学習と協働学習を往還する授業デザインで、知識を構造化・概念化する「深い学び」に導く

國學院大學 人間開発学部初等教育学科 教授

**田村 学** たむら・まなぶ

中央教育審議会（以下、中教審）の2021年1月の答申では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指すことが示された。しかし、教育現場では、「協働的な学び」が形式的な活動にとどまっているケースも見られる。「協働的な学び」を充実させ、その成果を「個別最適な学び」に還元するためには、何が重要になるのか。本分野において研究・発信を続けている國學院大學の田村学教授に聞いた。



◎新潟大学教育学部卒業。専門はカリキュラム論など。新潟県公立学校教諭、同県柏崎市教育委員会指導主事、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官、同省同局視学官などを歴任。同省で新学習指導要領の作成に携わる。2017年度から現職。『深い学び』『学習評価』（いずれも東洋館出版社）など、著書多数。

## 授業改善の方向性は同じ 「主体的・対話的で深い学び」

2021年1月に公表された『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（答申）を見て、疑問を感じた先生方は多いかもしれません。新学習指導要領の下、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて着手したばかりなのに、答申には「個別最適な学び」「協働的な学び」といった新たなキーワードが並んでいたからです。

ただ、それによって育成を目指す資質・能力や、そのための授業改善の方向性が変わったわけではありません。「主体的・対話的で深い学び」を目指す中に「個別最適な学び」と「協働的な学び」の視点を持つことで、学びの一層の充実を図ろうとしているということです。コロナ禍でGIGAスクール構想が前倒しされ、オンライン学習の環境が急速に整備される中で、現状に合った教育のあり方を、答申によって改めて示したのだと、私は捉えています。

では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」は、それぞれどのような学びで、どういった関係にあるのでしょうか。答申では、「個別最適な学び」として、「指導の個別化」と「学習の個性化」が示されました。「指導の個

別化」は、習得の場面で一人ひとりの子どもを丁寧に見ることで知識の獲得を支える学びをイメージするとよいでしょう。一方、「学習の個性化」は、探究学習などで個々の個性や興味・関心を生かして学びを深めていく場面などが想定されます（図1）。

昨今、AIドリルを始めとするデジタル教材によって、個別学習をより効果的に進められるようになりました。ただ、学びは学習者1人では完結せず、他者との協働が欠かせません。個別学習で得た知識を、「協働的な学び」に生かして問題解決などを

行うことで、他教科や社会で生かせるような汎用性の高い知識が定着します。また、そうして得た知識を個別学習に生かすことで、子どもは新たな知識を得ていきます。「個別最適

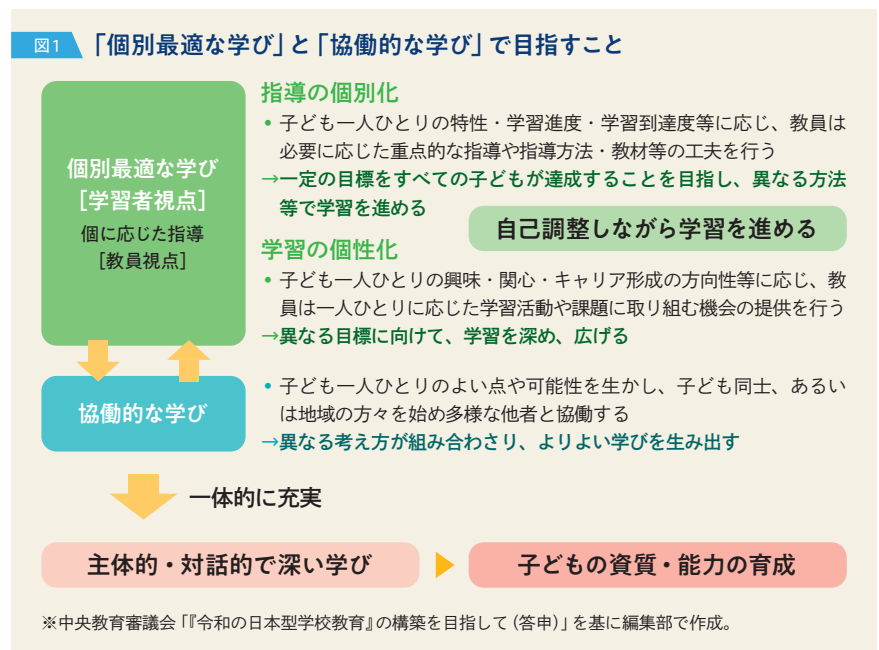
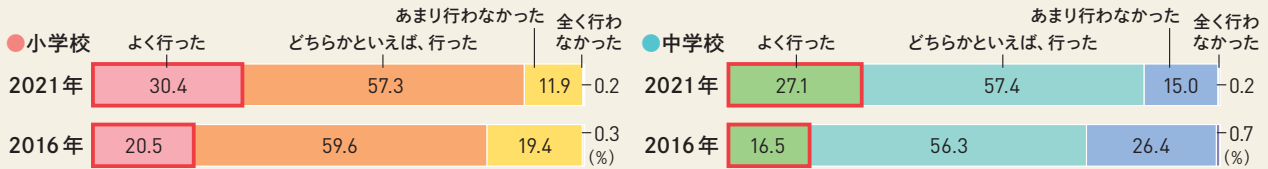
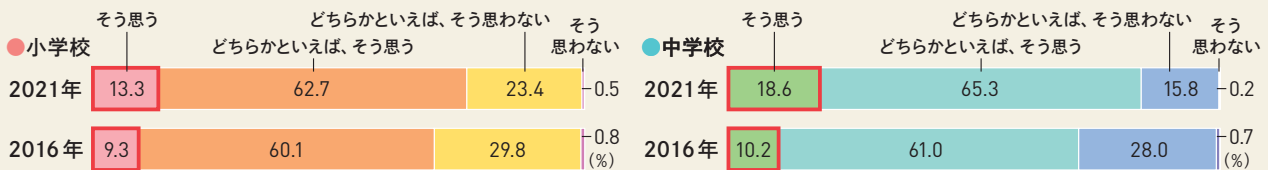


図2 「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善に関する取り組み状況

Q. 授業において、児童生徒自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動を取り入れましたか。



Q. 児童生徒は、学級やグループでの話し合いなどの活動で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか。



「協働的な学び」を「よく行った」と回答した学校は、小・中学校とも3割程度と増加傾向だ。しかし、「協働的な学び」を通して児童生徒が「自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思うか」については、「そう思う」は増加しているものの、1～2割にとどまった。「協働的な学び」の実施に比べて、十分な成果が得られていないと感じている学校が多いことがうかがえる。

※文部科学省・国立教育政策研究所「令和3年度 全国学力・学習状況調査の結果（概要）」を基に編集部で作成。

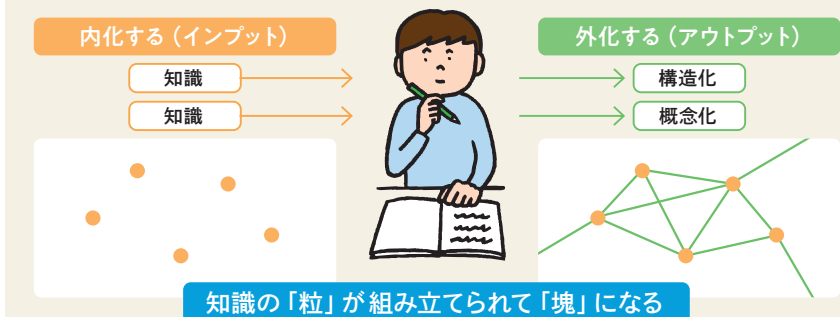
な学び」と「協働的な学び」は、そうした一体的な関係にあるのです。

教育のICT化が進み、学校の存在意義が改めて問われている中で、「令和の日本型学校教育」として「協働的な学び」が位置づけられた意義は、極めて大きいでしょう。オンライン学習の環境が整えば、子どもが学校に通う意味がなくなるのかというと、決してそうではありません。これからの時代に求められる資質・能力を育むためには、多様な考えや価値観を持つ人々が集まって学び合う場が必要不可欠なのです。今回の答申は、そうした学校の存在意義を明確に定義し直した重要なメッセージであると、私は受け止めています。

### 個別学習で得た知識の「粒」を協働学習で「塊」にする

以前に比べ、授業でペアやグループでの活動がよく行われるようにな

図3 知識の内化から外化への流れ



※田村教授の提供資料を基に編集部で作成。

り、「協働的な学び」は着実に広がりました（図2）。ただ、思考が十分に深まらないなど、質的な課題があると感じています。その原因の1つに、子どもがただ話し合うだけといった場面が挙げられます。「深い学び」に導くためには、個別学習から協働学習に展開する過程で、子どもの認知が変化する次のプロセスを、教員が理解する必要があります。

個別学習では、ある教科のある単元といった限定された場面で、知識

を内化（インプット）します。個別にインプットした知識は、それぞれのつながりがない「粒」の状態です（図3）。「粒」のままの知識では、一問一答式のような問題にしか活用できず、時間が経つと忘れてしまいがちです。

話し合いなどの協働学習を行うと、他者から新たに得た知識を内化しつつ、個別学習で得た知識を組み立てて外化（アウトプット）します。話し合いの過程で、自分の考えと他者の考えを比較・分類・関係づけしたり、

自分の考えを多面的に捉え直したりすることを通じて、「粒」が結びついて「塊」となり、知識が構造化・概念化されていきます。そのように知識の質が高まると、「他の授業でも使える」「社会に出てからも役立つ」といった感覚を持てるようになるのです。

教科学習と同様に、「総合的な学習の時間」などの探究学習の際にも、協働学習は欠かせません。探究学習では、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」を繰り返して、学びの質がスパイラルに高まっていくことが期待されます(図4)。そうした個別学習と協働学習の往還の過程で、知識や情報の内化と外化が繰り返され、社会で期待される資質・能力の育成に結びつきやすくなります。

探究学習は、子どもの個々の興味や関心に基づいて行われるため、より自律的に学ぶ姿が見られます。それぞれのプロセスで個別学習と協働学習をいかに往還させるかを考え、適切に授業設計をすることで、「深い学び」に導くことができるでしょう。

## 知識が結びつき、思考が深まる 協働学習のデザインが必要

注意が必要なのは、子どもに任せきりの活動では協働学習の質が高まらないことです。個々の子どもがどのような知識や情報を持ち、それらが話し合い等を通じてどのように結びつき、どういった思考に到達してほしいのかをイメージして、協働学習をデザインする必要があります。

一例として、中学1年生の社会科の単元「アメリカ合衆国」の最後の授業で、知識構成型ジグソー法\*によって生徒の思考が深まっていった様子を紹介します(図5)。

4人の生徒は、アメリカの「大企業の本社」「植民地化」「観光地」「国立公園、自然遺産」のいずれかの調査をしてから、グループワークに臨みました。話し合いはとても活発に見えましたが、事後に1人の生徒に話を聞くと、思いのほか考えは深まっていませんでした。そこで、いくつか質問をすると、次第に他のメンバー

の考えが結びついて、知識が構造化されていく様子が見て取れたのです。

そのように、子ども自身が「なぜだろう」「どうしてだろう」と自問自答できるようになるまで教員が問いかけて、思考の深まりを支援する授業をデザインしましょう。どうすればグループワークで他者の持つ知識が結びつきやすくなるかを検討し、例えば、「アメリカの地図を真ん中に置いて話し合わせる」など、適切な環境を設定できると、イメージするゴールに到達しやすくなるはずです。

## 協働学習で得た学びを 「振り返り」で確かなものに

協働学習の後に振り返りなどの個別学習を行うことも、より確かな学びにつなげるためには重要です(図4)。振り返りによって、自身の変容や成長を自覚するとともに、新たな疑問や関心が生まれます。それが次なる学習意欲を喚起して、学びのサイクルが回っていくからです。

教員が、子どもに到達してほしい状態を明確にイメージできると、それは評価規準になります。振り返りの際、子どもにその規準を示しながら、「今日はこんな視点で振り返ってみましょう」「自分のことここを比べて書きましょう」などと伝えれば、子どもは何をどうやって捉えればよいか分かり、振り返りの記述がより具体的になるでしょう。

協働学習では主に音声言語が使われますが、振り返りでは文字言語によるアウトプットが効果的です。音声言語は、相手と情報を共有しやすいですが、少しあいまいで失われやすい面があります。一方、文字言語は、意味が明確であり、蓄積もしやすいため、学びの成果を振り返ってメタ認知しやすい利点があるのです。

図4 「個別学習」と「協働学習」の往還の例



個別学習で得た知識や考えを生かしながら、他者との意見交流などの協働学習をする。そこで知識が構造化・概念化されたり、考えが深まったりしたことは、振り返りなどの個別学習をすることで学習者の中で認知化され、深い学びにつながっていく。

※文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総合的な学習の時間編」「学びのイノベーション事業実証研究報告書」(2014)「教育の情報化に関する手引」(2019)などを基に編集部で作成。

\* ジグソーパズルを解くように、協力して全体像を浮かび上げらせる協調学習法の1つ。ある課題について、複数の視点で書かれた資料を読む「エキスパート活動」、そこで得た知識を交換し、考えを深めていく「ジグソー活動」、全体でグループの意見を交換する「クロストーク活動」を経て、個人で改めて課題に向き合う。

図5 「知識の構造化」により、深い学びに向かっていくプロセス (例)

◎中学校1年生 社会科「アメリカ合衆国」

生徒の発言	教員の問いかけ
大企業の本社がアメリカ東海岸に多いのは、周辺に農業が盛んな地域があるからだと思います。	みんなと話して、考えは変わりましたか？
大きくは変わりません。少しは、理由が確かになりました。観光地も自然公園も植民地のことも、直接は関係ありませんでした。	全く関係ないのかな？
観光地が多いのは人口と関係があるようだから、大企業の本社が東海岸に集中していることは関係があるかもしれません。	それだけ？ 植民地化は関係なさそう？
ヨーロッパによる植民地化は東海岸から進んでいったから、最初は食糧を確保するために農業が盛んになり、結果的に歴史ある大企業の本社が東海岸に残っているのかもしれない。 <b>知識の構造化</b>	ヨーロッパが東海岸寄りであったから、東海岸に本社が集中したのかな？
サンフランシスコやロサンゼルスなどは地中海性気候だから、農業が発展して同じようになったかもしれないけれど、内陸は乾燥地帯だから同じようにはならないと思う。きっと東側には五大湖があって、水資源が確保できたはずだし…。だから、西側に自然の豊かな国立公園も残っているのかな。 <b>知識の構造化</b>	

※田村学著『深い学び』(P.110-116、東洋館出版社)を基に編集部で作成。

向いているかもしれません。「何事も実体験がよい」と思い込まず、柔軟に使い分けることで、子どもの学びが深まり、豊かになっていくのです。

### 教育委員会に望まれる3つの支援

「協働的な学び」の充実に向けて教育委員会ができる支援としては、次の3つが考えられます。1つめは、「こんな授業を目指してほしい」「子どもにこんな力が育ってほしい」といったイメージを明文化し、学校と共有することです。その土台があって初めて、具体的な施策が意味を帯びてくると考えます。

2つめは、ICTを活用して、「協働的な学び」に思考ツールを積極的に取り入れることです。特に、「協働的な学び」においてICTの活用があまり進んでいない場合は、一定の促進策を教育委員会が主導していくことが有効でしょう。多くの子どもは思考ツールが好きですから、「協働的な学び」の充実につながるに違いありません。

3つめは、授業の振り返りが充実するように支援することです。繰り返しになりますが、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指すためには、インプットした知識を自分の言葉で再構成してアウトプットする振り返りが極めて重要です。

「協働的な学び」に関する研修を実施する際には、方法論ではなく、まずは認知プロセスの理解から始め、いかに授業をデザインしていくかを、子どもの学びの姿と結びつけて説明するとよいでしょう。その中でICTの効果的な活用法を伝えられれば、より深く、豊かな学びを実現できると思います。

### ICTの利活用で「協働的な学び」がより豊かに

知識の内化・外化には、ICTの活用が非常に効果的です。例えば、インターネットの利用によって大量の情報が容易に手に入るようになり、内化がしやすくなりました。

外化でのICTの活用には、タブレット端末などでの「思考ツール」(巻末のキーワード解説参照)の使用が挙げられます。話し合いなどで「思考ツール」を使って自分の考えを可視化すれば、認知プロセスを活性化しやすくなります。紙と鉛筆でも「思考ツール」は使えますが、タブレット端末などでは、書き直しが容易にでき、保管や他者との共有もしやすくなります。

また、振り返りをテキストデータにして蓄積すれば、履歴が膨大になっても検索は容易です。ただし、キーボード入力が未熟だと、記述量が減ってしまう場合があるので、子どもの

発達段階や個々の状態を踏まえて、紙かICTかを選択する必要があります。いったん紙に書き、それを撮影して記録する方法も考えられます。手書きの文字を撮影すると、テキストデータ化してくれるソフトの利用も1つの方法でしょう。

ICTによって、時間や空間を超えて協働学習を行うことも可能になりました。オンライン会議ツールを使えば、世界中の人々とリアルタイムに対話することが可能です。子どもに国際感覚を養うためにも、利用しない手はありません。

一方で、状況に応じて、対面とオンラインのどちらが適切かを判断することも求められます。例えば、探究学習で地域のせんべい店の店主から話を聞く場合、店内の雰囲気やせんべいの香りを感じながら話を聞くことに意味があると考えるなら、店を訪問するとよいでしょう。店主の話の内容に集中させたいければ、余計な情報が入りづらいオンラインの方が

# 「自分で考え、学び合い、振り返る」を1コマの基本に。 探究学習でも小単元で個と集団の学びを繰り返す

## 秋田県 だいせん おおまがり 大仙市立大曲小学校

秋田県大仙市立大曲小学校では、秋田県が長年推進してきた探究型授業を基盤として、2018年度から全教科の授業で、「主体的・対話的で深い学び」を実践するための校内研究を行ってきた。授業づくりで重視するポイントは、個別学習と協働学習を行き来して、学びの質を高めることだ。「総合的な学習の時間」でも、そうした個と集団の学びを行き来する活動によって、子どもは自己の変容を自覚し、考えを深めている。



◎校是は、「こころひらいて ゆめをそだてる」。学校教育目標は、「I will, I can. One for All, All for One. ～きっとできる みんなといっしょに」。「総合的な学習の時間」は、『『地域で学び』『地域から学び』『地域に生きる』』子どもの育成」を研究主題として活動を推進している。

開校 1874 (明治7) 年  
校長 高野一志先生  
児童数 693 人  
学級数 29 学級 (うち特別支援学級 4)

### 子どもが見通しを持って学びに集中できる「教えのきほん」

校内研究重視の学校文化を有する大仙市立大曲小学校は、2018～19年度、国立教育政策研究所の研究推進拠点校として、「主体的・対話的で深い学び」に関する学習・指導方法の研究を行った\*1。指定期間終了後も研究は継続。2021年度は、算数科を中心とした「見方・考え方」を働かせる学び合いと、「人・もの・こと」にかかわって主体的にテーマを追究する「総合的な学習の時間」の活動に重点を置き、研究に取り組んでいる。高野一志校長は次のように語る。

「毎年、前年度までの研究の成果や課題と、子どもの実態に基づいて、研究テーマを設定しています。本校の子どもは、素直に伸び伸びと学ぶよさがある半面、各種調査を見ると、自己有用感や自尊感情がやや低いという結果が出ています。そこで、子どもが自分のよさに気づき、周囲に認められる喜びを感じられるよう、他者とのかかわりを意識した活動を、授業に取り入れています」

授業づくりの土台となるのは、小・中学校の学びに連続性を持たせるため、中学校区全体で作成した授業の手引き「教えのきほん」だ。同市では、中学校区ごとに小・中学校が連携して教育活動を行う「大仙教育メソッド」(P.11教育委員会の施策参照)を推進しており、「教えのきほん」はその1つに位置づけられている。

「教えのきほん」は、以前から実施されてきた秋田県の探究型授業を基盤とし、授業の流れを「めあて」「自力解決」「学び合い」「まとめ」「振り返り」と設定(図1)。すべての授業がこの流れに沿っており、子どもが見通しを持って授業に集中できるようにした。また、板書の仕方やノートへの写し方なども示している。

### 自分の考えを持たせてから協働的な学びにつなげる

授業の流れでとりわけ重視しているのは、「個」と「集団」の学びをつなぐことだ。5学年担任の畑七彩先生は次のように話す。

『『自力解決』で個人の考えを明確



校長  
高野一志  
たかの・ひとし  
同校に赴任して1年目。



研究主任  
今野靖子  
この・やすこ  
同校に赴任して5年目。



教諭  
畑七彩  
はた・ななせ  
同校に赴任して3年目。  
5学年担任。

に持たせてから、ペアやグループ、全体での『学び合い』を行っています。自分の考えがあるからこそ話し合いの場で発言でき、他者の考えをしっかりと聞いて、理解しようとしています」

「学び合い」では、教員は子どもの考えを広げる発問をし、子どもの発言をつなげることに努めている。「教えのきほん」には、「何のために何を話せばよいかを理解している」「話をつなぐことを意識している」など、

\*1 研究テーマは、「教科等の本質的な学びを踏まえた主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)の視点からの学習・指導方法の改善の推進」。

図1 「教えのきほん」で示されている1時間の授業の流れ(全教科共通)

めあて	学習のねらい・学習課題(めあて)・学習活動・評価の整合性を図る
自力解決	児童一人ひとりが自分の考えを持って話し合いに参加できるようにする
学び合い	確かな発問が学び合いの質を高める⇒発問の精選
まとめ	「まとめ」は「学習課題(めあて)」と整合させる
ふり返し	自己の変容を自覚できるように振り返りの視点を示す

※大曲小学校の提供資料を基に編集部で作成。

図2 高学年の「ふり返りの5つの視点」

- 5年生 ふり返し
- 1 わかったこと
  - 2 自分や友だちの考えのよかったところ
  - 3 自分の考えが  
変わったり深まったりしたこと
  - 4 もっと学習したいこと
  - 5 生活や学習で役立てたいこと

※大曲小学校の提供資料を基に編集部で作成。

5つの「話し合いの約束」があり、それを子どもにも示していると、研究主任の今野靖子先生は説明する。

「授業づくりの際には、場面ごとに話し合う必要性を教員が十分に検討しており、子どもに話し合いのねらいを説明します。ねらいを意識することで、子どももなんとなく話し合うのではなく、明確な目的に向けて意見を出し合うようになり、協働学習が充実していきます」

協働学習で得た学びを次の学習につなげられるよう、授業の終わりには必ず振り返りを行う。「教えのきほん」には、低・中・高学年ごとに「ふり返りの5つの視点」(図2)があり、各教室に掲示し、教員は学習内容に合わせて、「今日は3番の視点で振り返ろう」などと活用している。

「自分の考えが、協働学習によってどう変容したかを振り返ることで、次の学びの見通しや学習意欲につながり、自分自身を客観的に捉えるメタ認知能力も磨かれます。自らの変容や成長を自覚できれば、自己有用感も向上するでしょう。そのように、集団の学びと個の学びを繰り返すことを大切にしています」(高野校長)

### 探究学習の各プロセスで 個と集団の学びを行き来する

2021年度の研究テーマの1つである「総合的な学習の時間」でも、個

図3 「総合的な学習の時間」探究プロセスの繰り返し(個別学習と協働学習の往還)例

#### 5年生 「大曲の食を守り隊！ 発見・発信！ ふるさとの食の魅力」(全35時間)

**単元目標** 地域の食の魅力や問題について興味を持ち、自分の課題を設定し、調べる活動や体験活動を通して、学んだ地域の食について発信する。それらの活動を通して、食に携わる人々の願いや工夫に気づくとともに、地域の食を未来につなげるために自分たちにできることを考え行動できるようにする。



( )内の数字は授業時数。※大曲小学校の提供資料を基に編集部で作成。

と集団のつながりを重視している。

畑先生が担任を務める5年生では、地域の食の魅力や課題に気づき、自分たちにできることを考えて発信する活動に取り組んだ。全35時間の中に「発見編」「実態調査編」「発信編」の3つの小単元を設け、各小単元で「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」等を行い、課題解決能力の育成を図った(図3)。

「小単元ごとに必要なプロセスを重ねて、個別学習とグループや全体による協働学習を行き来し、子どもが考えを深められるような授業を展開しました」(畑先生)

各活動で活用したのは、思考ツール(巻末のキーワード解説参照)だ。発見編では、「イメージマップ」でアイデアを広げたり、「リーダーチャート」で多様な視点の重要度を整理したりして、食の魅力や課題を探った。発信編では、グループで計画的に活動を進められるよう、「ステップチャート」でやることを整理した。

「自分の考えを整理したり、他者の意見を比較して分類したりと、思考ツールが考えを深める手助けとなりました。今後は、教科の授業でも、子どもが思考を整理する際には活用したいと考えています」(畑先生)

## 自身の変容や成長を自覚し、次の見通しや意欲につなげる

単元の最後の35時間目は、すべての活動を振り返り、自分たちの問題意識が高まり、自ら進んで地域とかかわってきたことに気づけるような活動を行った(授業レポート1~6参照)。

本時のねらいを確認した後(1)、地域の食について発信したいと最も強く感じた場面を振り返り、それに関する自身の掲示物をタブレット端末で撮影した(2)。そして、その写真をグループ内で見せ合いながら、どの学習や活動で、どのような気づきや変化があったのかを伝え合った(3)。

子どもたちは、「全校にアンケートを取ったら、地域の食について知っている人が少なく、みんなに伝えたいと強く思った」「地域の食に詳しいゲストティーチャーから『何事も楽しんでやろう』と言われたことがきっかけになった」などと、それぞれが変化したきっかけを語った。

次に、グループで話し合った内容をクラス全体で共有する場面では、畑先生の自作による身長計を使った「レベルアップメーター」で、高まった思いを示しながら、数人が振り返りを発表した(4)。

さらに、教科の学習内容が、探究学習にも役立つと気づくことをねらいとしたグループワークも行った(5)。タブレット端末の共同編集ソフトを活用し、「話を聞いてメモを取る(国語科)」「図や表を使って分かりやすくまとめる(国語科)」「グラフを読み取る(算数科)」「農業の実態(社会科)」など、教科での既習内容を記したカードを、畑先生が用意。子どもは、それらを探究活動のどの場面で活用したかを考えて、あてはまる場面にカードを配置し、グループ内でそれを共有しながら話し合った。

「タブレット端末上なら間違えてもすぐに修正できるため、子どもは『とにかく書いてみよう』などと積極的になれるようです。また、共同編集機

能を使えば、入力した内容を全員がリアルタイムで共有できるため、協働学習が促進されるよさがあります」(畑先生)

本時の振り返りでは、本時の「目指す児童の姿」に対応して、「学習の中でがんばったこと、またはできるようになったこと」「『大曲の食』について、知ったことや考えたこと、感じたこと」「地域とかかわることができたか」という3つの振り返りの視点を示した。子どもたちは、「友だちと協力して、見てくれる人に『これを食べてみたい』と思ってもらえるものを作れるようにがんばりました」「自分1人ががんばるのではなく、他の人と支え合って学習を大成功させられたと思います」「大曲には有名な食べ物は少ないと思っていたけれど、意外にたくさんあると分かりました」など、自己の変化を記述した(6)。

「本時の振り返りは、協働学習による自身の変化を捉える機会にしたいと考えました。子ども自身が学校で

### 授業レポート 探究学習

#### 5年生「総合的な学習の時間」(全35時間中の35時間目)

学習課題「守り隊レベル」\*2がアップしたのはいつか？なぜか？「大曲の食を守り隊！」の活動を振り返ろう。

#### 1 本時のねらいを説明 8分間



畑先生が「クラスのアンケート結果では、大曲の食の魅力や課題への認知度が、全員、学習前より高まっていました」と伝えて、これまでの活動を振り返った後、「『守り隊レベル』がアップしたのはいつか？なぜか？」という本時の課題を提示した。

#### 2 個人で活動全体を振り返る 5分間



初めに、「守り隊レベル」がアップした時が「大曲の食について発信したい思いが高まった時」であるとクラス全体で共有。これまでの活動の中でそうした思いが最も高まった場面を、各自が振り返り、それに関連する自身の掲示物をタブレット端末で撮影した。

#### 3 振り返りをグループで発表 9分間



自分が撮影した写真を見せながら、その活動を通して考えたことや感じたことを、グループのメンバー同士で伝え合った。畑先生が用意した、考えの視点や話型、「レベルアップメーター」を示した資料を基に、自身の気づきをしっかり伝えていた。

\*2 大曲の食を大事にしたいという気持ちの強さ。

教育委員会の施策

中学校区ごとの方向性を定め、教育活動を行う「大仙教育メソッド」を推進

2016年に策定した大仙市教育大綱では、教育目標に、「生きる力を育み、社会を支える創造力あふれる人づくり」を掲げています。この「生きる力」となる資質・能力を「基礎となる力」「学ぶ力」「活かす力」とし、それらの育成を図るため、中学校区ごとに明確な方向性を定めて、教育活動を行う「大仙教育メソッド」を推進しています。各中学校区が、小・中学校校長の経営感覚と各学校の強みを生かして活動しています。教育活動に統一性が出て、小・中の接続が滑らかになる利点もあります。

授業づくりでは、市を挙げて「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す中で、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実を図っています。本市では元々、秋田県が推進してきた探究型授業を実践

する中で、個と集団をつなぐ学びを重視してきました。「個別最適な学び」では、少人数授業やチーム・ティーチングといった指導形態の工夫、児童生徒主体の探究型授業などを行っています。「協働的な学び」では、協働の際に必要な言語活用能力の育成に力を入れています。また、中学校区ごとに地域住民等が支える「地域学校協働活動本部」を設置し、地域の教育力を生かした体験活動などの充実を図っています。今後はICTも積極的に活用して、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一層一体化させていく考えです。



大仙市教育委員会  
教育指導課次長  
兼教育研究所長  
**山信田 浩**  
やまだ・ひろし

●自治体概要  
人口 約7万8,000人  
面積 866.8km<sup>2</sup>  
市立学校数 小学校20校、  
中学校10校  
児童生徒数 4,945人

学ぶことの意味を改めて考え、日々の授業でも自分の成長に気づけるようになってほしいと思います(畑先生)

子どもの心を動かす  
地域との協働学習を充実

探究学習において子どもが大きく成長する場面の1つは、地域との協

働だ。振り返りでも、「お菓子屋さん(地域の老舗店舗)を通して地域の食の魅力を知った」など、地域とかかわる活動の中で気づきが得られたといった記述が多く見られた。同校では、地域連携は協働学習を促進する重要な要素だと捉えている。

「何かを調べて分かったり、疑問を持ったり、課題意識が生まれたりし

た時に、そこで終わるのではなく、地域の課題や人々の思いと結びつけることで、『自分にもできることがありそう』などと、子どもの心が動いて成長していく姿が見られました。そうした地域との協働学習を柱の1つに据えて、『主体的・対話的で深い学び』の充実を図っていきたいと考えています(高野校長)

4 全体で振り返りを共有 8分間

8分間

協働



これまでの活動を示す黒板の図の中で「守り隊レベル」が高まったものに自分のネームプレートを貼り、クラス全体の状況を確認。数人が、地域とのかかわりが高まった度合いを、身長計で作った「レベルアップメーター」で示しながら、自分の変化を発表した。

5 教科学習とのつながりを考える 7分間

7分間

協働



タブレット端末に用意されたカードに書かれた他教科の既習内容が、3つの小単元のどの活動で役立ったのかを考えた。共同編集ソフトを活用し、グループのメンバーがどの活動にどの教科のカードを配置したかをリアルタイムで共有しながら話し合った。

個別：個別学習

協働：協働学習

6 本時の振り返り 8分間

8分間

個別



本授業に参加した、活動の協力者である地域の老舗菓子店の店主から講評を聞いた後、本時の振り返りをワークシートに記入。数人が発表して全体で共有した。畑先生は、培った課題解決力を今後の授業でも生かしている。いろいろな問題解決に取り組んでいこうと伝えた。

# 課題設定や、思考を揺さぶる「第二の発問」で、 個の思考を深め、議論の活性化につなげる

## 福井県 福井市明倫中学校

2015年度から、「主体的・対話的で深い学び」の視点で授業改善を図っている福井県福井市明倫中学校。2021年度は、「自らの問いをもつ」「他者と共に豊かに学ぶ」の2つを研究の視点とし、意見を認め合うことから一歩踏み込み、互いの意見に疑問を出し合い、批評や反論をすることで、自らの考えを練り上げる協働学習を目指している。生徒の疑問を基に学習課題を設定したり、「第二の発問」で考えを揺さぶったりする工夫により、学び合いの質が高まっている。



◎校訓は、「誠実 節度 実践」。学校教育目標に「未来を切り拓く生徒の育成」を掲げる。部活動も盛んで、ハンドボール部や柔道部などが全国大会に出場。同校の授業改革は、『問い、対話、振り返りによる中学校の授業改革』（田村学著、小学館）で紹介されている。

開校 1947 (昭和 22) 年  
校長 小林孝史先生  
生徒数 760 人  
学級数 26 学級 (うち特別支援学級 2)

### 4つの部会で、生徒が安心して 発言できる授業づくりを研究

福井市明倫中学校は、2015年度より、福井県及び福井市教育委員会から研究指定を受け、「主体的・対話的で深い学び」の視点で授業改善に取り組んできた。重点を置くテーマを毎年変えながら研究を進め、指定終了後は重点を「創造力」「探究力」に移し、授業づくりを進化させている(図1)。

研究体制は、全教員が、「授業づくり部会」「居場所・絆づくり部会」「集団づくり部会」「地域づくり部会」のいずれかに所属。研究主任や各部会長らによる「研究推進委員会」が全体を統括する。小林孝史校長は、4つの部会が授業づくりを支えていると語る。

「安心して発言できる雰囲気が教室にあってこそ、協働的な学びは成り立ちます。そうした生徒の学びを支えるものとして、『居場所』や『集団づくり』を重視しています」

福井県では、1人の教員が複数学年の授業を担当する「縦持ち」を基本としている。同校も、例えば社会科では、6人の教員が3学年24学級の

授業を分担する。そのため、時間割に週1回の教科会を組み込み、学年ごとの情報共有や連携を図っている。

### 生徒の話し合いで出された 疑問を、次時の学習課題に

2021年度は、研究主題を「自らの問いをもち、他者と共に豊かに学ぶ生徒の育成」とし、「自らの問いをもつ」「他者と共に豊かに学ぶ」の2つの視点で研究を進めている。2020年度末に行った生徒の特徴の分析結果では、よい面として、「真面目に落ち着いた学習に取り組む」「与えられた課題に自分の意見を持ち、伝え合うことができる」などが挙げられた。一方で、学習内容に新たな疑問を持つことが少なく、話し合いでは異なる角度からの意見を述べることに消極的な姿が課題とされた。研究主任の岩本鷹薫先生は、研究のねらいをこう説明する。

「互いの意見への疑問や矛盾を素直に伝え、批評や反論をすることで、個々の考えが深まり、新たな関心や疑問が湧いて、それが次の学びに発展していきます。互いの意見の認め



校長  
**小林孝史**  
こばやし・たかし  
同校に赴任して1年目。



研究主任  
**岩本鷹薫**  
いわもと・まろか  
同校に赴任して5年目。  
社会科。1学年担任。



授業づくり部会長  
**浅川健一**  
あさかわ・けんいち  
同校に赴任して1年目。  
理科。1学年担任。

合いから一歩踏み込んだ協働学習にする仕かけが必要だと考えました」

その仕かけの1つが、生徒が当事者意識を持てる学習課題の設定だ。

「単元の導入時に班で調べ学習を行い、各班が調べた結果を対比します。出てきた疑問や矛盾を基に、その後の授業の学習課題を設定するといった工夫をしています。『知りたい』という意欲が湧き、意見の交流が活発になります」(岩本先生)

例えば、理科では、身近なものを理科的視点で捉えさせたり、実験であえて失敗をさせたりしていると、理科担当の浅川健一先生は語る。

「光の単元では、水に入れた指が短く見えることを実体験させるなど、生徒が疑問を持てるようにしました。また、手順の説明を簡略化して実験をし、教科書と異なる結果が出た理由を考えるとといったこともしました」

社会科担当の岩本先生は、思考ツール（巻末のキーワード解説参照）をよく使う。考えを可視化することで互いの意見への理解が進み、話し合いでも疑問が出やすくなったという。

## 授業づくりに「第二の発問」を組み込み、思考を揺さぶる

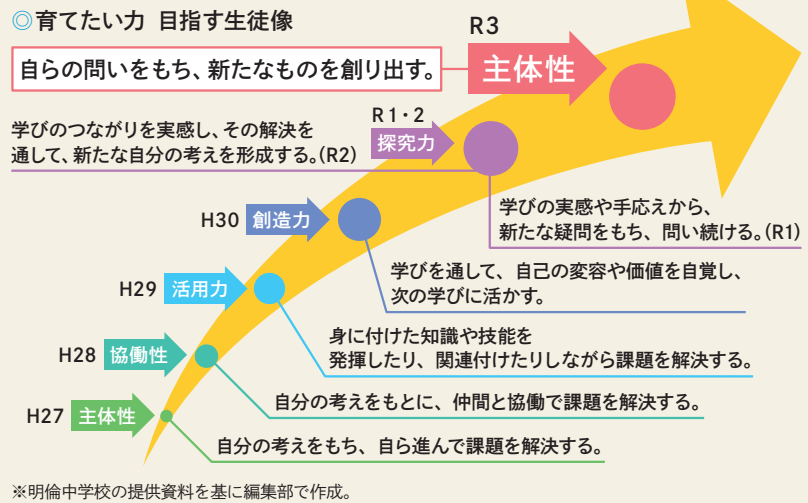
「第二の発問」も、一歩踏み込んだ協働学習にするための仕かけだ。導入時の課題（第一の発問）に対して、班ごとに異なる意見が出たら「各班の意見を比較しよう」と問いかけ、意見が似ていたら「こんな資料もあるけれど、どう思う？」などと発問・切り返しを通して、生徒の思考を揺さぶる。

「これまでも教員は、生徒の発言に対して切り返す問いを発していましたが、それを戦略的に授業に組み込んだのが『第二の発問』です。生徒全員が思考の階段を自ら2段目、3段目と上れるようにし、議論の活性化や個人の思考の深まりにつなげることを意図しています」（岩本先生）

岩本先生は昨年度、1年生の地理でオーストラリアと中国との良好な貿易関係を扱った後、「第二の発問」で、コロナ禍の対応を巡り両国がけん制し合っているという最新ニュースを提示。「オーストラリアはこの状況にどう対応すべきか、自分だったらどうするか」と、生徒に問いかけた。

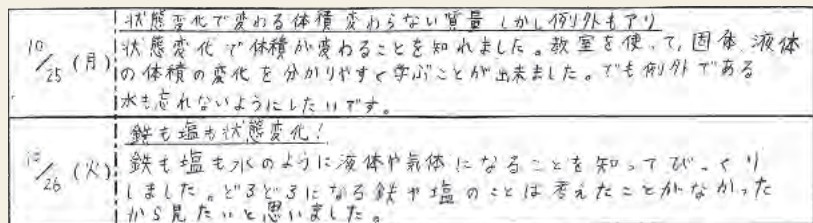
『貿易面や観光面を考えて、友好

図1 校内研究における「育てたい力 目指す生徒像」の発展



※明倫中学校の提供資料を基に編集部で作成。

図2 理科「レベルアップを実感できる紙」1年生の記入例



※明倫中学校の提供資料を抜粋して掲載。

関係を続けた方がよい』『中国との関係が不安定なら、他のアジアの国との関係を強めた方がよいのではないか』などの発言がありました。生徒は、学習内容を現実の社会と結びつけ、深い考えを示していました」（岩本先生）

「第二の発問」は、単元計画の際に生徒の発言を推測し、どのようなねらいで、どの場面でどのような発問をすればよいかを事前に吟味している。

「授業は生き物ですから、予定とは異なる切り返しが必要なこともあります。そのため、各教員の授業力を高めています」（小林校長）

## 振り返りをしやすいよう、教科別に手法を工夫

振り返りは、学習内容の確認に加

え、自己の変容や既習事項との関連を自覚する機会として重視。視点を提示したり、条件を絞ったりするなど、各教科が様々に工夫する。理科では、毎時間の振り返りを「レベルアップを実感できる紙」に書き、自己の変容を俯瞰できるようにしている（図2）。

「振り返りの前には、席が近い生徒同士で授業の感想や疑問を、必ず1～2分間話すようにしています。短時間でも他者に話し、頭の中を整理してから書くことで、文字量が増え、内容の質も高まります」（浅川先生）

社会科では、単元の最初と最後に同様の発問をしている。

「江戸時代がどんな時代かを問うと、単元の最初は、『徳川家康が築いた武士の時代』など、小学校の学習内容を答える程度ですが、最後には、

幕末に活躍した地元の偉人などを絡め、明治時代への移り変わりも捉えて書けるようになります。振り返りでは、協働学習によって視野が広がり、考えが深まったことを自覚できるような構成にしています」(岩本先生)

### 多様な意見に触れて、 個々の問いへとつなぐ

以上のような工夫をしながら、同校では全教科で、「個別学習→協働学習→全体共有→振り返り」を、授業の基本スタイルとして確立している。

「教科学習でも、探究的な学びを規模の小さいサイクルで回すイメージです。その経験が『総合的な学習の時間』のような教科を横断する探究学習につながっていくと考えています」(小林校長)

浅川先生は、1年生の火山の単元を、生徒の疑問を学習課題にして展開しようと考え、単元初回の授業を行った(授業レポート1~6参照)。

図2 1年生 理科「火をふく大地」1時間目の配布資料とワークシート



資料は、15種類。「伊豆大島火山」「雲仙普賢岳」「桜島」に関する①火山の形、②色、③噴火の様子、④火山岩、⑤深成岩の各5項目を作成。生徒は、このうちの1枚を手にした。

火山名	雲仙普賢岳	桜島	伊豆大島火山
山の高さ	富士山の高さを超えている。この山は、富士山よりも高い。富士山は、2000メートル、この山は、2500メートル。	この山は、富士山よりも高い。富士山は、2000メートル、この山は、2500メートル。	富士山の高さを超えている。この山は、富士山よりも高い。富士山は、2000メートル、この山は、2500メートル。
山の形	富士山は、富士山よりも高い。富士山は、2000メートル、この山は、2500メートル。	この山は、富士山よりも高い。富士山は、2000メートル、この山は、2500メートル。	富士山の高さを超えている。この山は、富士山よりも高い。富士山は、2000メートル、この山は、2500メートル。
噴火の様子	富士山は、富士山よりも高い。富士山は、2000メートル、この山は、2500メートル。	この山は、富士山よりも高い。富士山は、2000メートル、この山は、2500メートル。	富士山の高さを超えている。この山は、富士山よりも高い。富士山は、2000メートル、この山は、2500メートル。
火山岩	富士山は、富士山よりも高い。富士山は、2000メートル、この山は、2500メートル。	この山は、富士山よりも高い。富士山は、2000メートル、この山は、2500メートル。	富士山の高さを超えている。この山は、富士山よりも高い。富士山は、2000メートル、この山は、2500メートル。
深成岩	富士山は、富士山よりも高い。富士山は、2000メートル、この山は、2500メートル。	この山は、富士山よりも高い。富士山は、2000メートル、この山は、2500メートル。	富士山の高さを超えている。この山は、富士山よりも高い。富士山は、2000メートル、この山は、2500メートル。

※明倫中学校の提供資料を一部改編して掲載。

本時の課題を確認した後(1)、火山に関する先生自作のA4判1枚の資料(図2左)を配布。学び合いを前提に、個人で調べ学習を行った(2)。次に、学習班\*で各自が調べた内容を共有し、分かったことをワークシート(図2右)に記入した(3)。

浅川先生は、配布資料の上半分は、火山の仕組みと鉱物に関する内容で統一したが、下半分は3つの火山に関する5項目の異なる内容とし、全15種類を用意した。1クラス32人のため、全く同じ内容の資料を手にするのはクラス内で2~3人しかいな

## 授業レポート 単元の問いづくり

### 1年生 理科 単元「火をふく大地」(本時は、全6時間中の1時間目)

本時の目標 楯状火山、成層火山、溶岩ドームの3種類の火山の共通点や相違点に気づき、本単元の学習

#### 1 本時の課題を提示 7分間



浅川先生は、電子黒板に噴火する火山の動画などを映し、本時から火山について学ぶことを説明。生徒からは「トンガで噴火があった」「富士山も火山だ」などと声が上がった。「火山の正しい知識を学んで、火山マスターになろう」と、本時の課題を提示した。

#### 2 火山について個人で調べる 12分間



生徒は、先生が配布した資料を読んだり、インターネットで調べたりして、火山について分かったことをワークシートに記入。「資料にある2次元コードで動画も見てみよう。ほかの人に説明できるように調べよう」と、浅川先生は生徒に呼びかけた。

#### 3 調べた内容を学習班で共有 6分間



4人の学習班になり、自分が調べた内容を説明し合った。生徒は資料の内容がそれぞれ異なることに気づき、「山が違うよ」「何が書いてある?」と、資料を見せ合った。浅川先生は、「疑問点は、ワークシートの『疑問点』の欄に書こう」と呼びかけた。

\* 席が近い生徒4人で組む、同校においてグループワークの基本となる班。

いと、浅川先生は説明する。

「生徒は、協働学習で、自分が調べた内容とは異なる情報を入手します。そこで火山の多様性を知り、火山といえば富士山を思い浮かべる生徒の固定観念を揺さぶろうと考えました。それも、私の説明ではなく、生徒同士のやり取りの中で『あれっ』と感じ、疑問を抱くことで、その後の学習に当事者意識を持たせようと思いました」

そのねらい通り、生徒からはさらに調べたいという声上がり、次は3つの火山ごとに班を組み直して学び合いを続けた(4)。浅川先生は当初、生徒が火山の形や色など、5項目の違いに着目するだろうと予想していたが、火山ごとへの関心が高かったため、予定を変更した。

「火山ごとの班にしたことで、生徒は1つの火山について詳しくなりました。クラス全体で共有した際には、最初は自分の調べた内容が他者の発言と違うことに戸惑っていましたが、『火山によって違う』と気づいてから

は、発言が多くなりました。多様な意見に触れたことで、生徒それぞれに問いが湧いてきたようです(5)」

最後に、これまでの学習で疑問に思ったことを再び学習班で伝え合い、本時の振り返りを記入した(6)。

ワークシートの「疑問点」の欄には、「地表と地下の深い所で岩石の色が違うのはどうしてだろう」「なぜ火山が爆発したら、雷が発生したり、津波が起きたりするののか」などと、生徒の様々な疑問が書かれていた。次時では、それらを整理して、その後の学習課題を設定し、調べ学習や実験で解決するといった展開を予定している。

「2次元コードで資料の各項目に関する動画を見られるようにしたところ、担当以外の火山の動画まで見て、マグマの色の違いに気づいたり、噴火口の形の違いに着目して調べたりする生徒もいました。私が説明するよりも、生徒はもっと細かく観察し、火山の違いに気づき、疑問を持っていました」(浅川先生)

### 生徒の発言をつなぐ ファシリテーション力が課題

小林校長は、今年度の研究の成果として、生徒の話し合いの様子に変化を感じていると話す。

「生徒は『なぜ、そう思うの?』『これはこうなのでは?』などと互いに疑問を伝え、それに対する自分の考えを述べるといった、研究主題を体現するような姿が見られています。しかも学年が上がるにつれて、それが活発化しています」

今後の課題は、教員のファシリテーション力を高めていくことだ。

「昨年末の校内研修で、教員の持つファシリテーションのイメージがまちまちだと分かりました。教員は話しすぎず、生徒の発言をうまく引き出し、つなげることで、生徒がいつの間にか深い学びに至っているという理想の実現に向けて、ファシリテーションに関する理解を深め、実践力を高めていきたいと思います」(小林校長)

を行うための問いをつくることができる。

#### 4 火山ごとに班を組み、共有 11分間



協働

資料には3つの火山について書かれていることを浅川先生が伝えると、生徒から「自分が調べた火山について詳しく知りたい」という声が上がった。そこで、同じ火山の資料を持つ生徒同士で班を組み、資料を見せ合ったり、調べた内容を伝え合ったりした。

#### 5 クラス全体で共有 9分間



協働

浅川先生は、3つの火山ごとに形や色、噴火の様子などについて、生徒の発言を板書し、2回の班活動の結果をクラス全体で共有。その間、生徒は、「同じマグマが噴火したのに、なぜ形が違うの?」「岩石はなぜこんなに種類があるの?」などとつぶやいていた。

個別：個別学習

協働：協働学習

#### 6 本時の振り返り 5分間



個別

再び学習班で本時の疑問を共有した後、本時の気づきや疑問を「レベルアップを実感できる紙」に記入。浅川先生は、鉱物含有量に関する生徒の疑問を紹介し、「次時からは今日の疑問を基に調べ学習や実験を行い、真の火山マスターになろう」と伝えた。

# 知識構成型ジグソー法<sup>\*1</sup>で行うグループでの 学び合いの繰り返しが、生徒の思考を一層深める

## 広島県 安芸太田町立加計中学校

広島県安芸太田町立加計中学校は、2010年度より、CoREF<sup>\*2</sup>が推進する「新しい学びプロジェクト」に参加し、知識構成型ジグソー法を取り入れた授業づくりに力を注いでいる。協働学習で異なる領域のエキスパート活動をした生徒は、その後の議論でも率直に意見を出し合うようになり、学力にとらわれない学び合いが実現。生徒個々の思考が一層深まるようになった。分からなかったことが分かるようになる経験は、生徒に、粘り強く学習に取り組む態度を育てている。



◎安芸太田町立安野中学校と同町立加計中学校が統合して開校。2015年度、「広島県『学びの変革』パイロット校事業」の指定校。2016年度より、広島県立加計高校と連携型中高一貫教育を推進。2018年度には1人1台端末が配備され、ICTを活用した授業づくりにも力を入れる。

開校 2003(平成15)年  
校長 羽村昭彦先生  
生徒数 52人  
学級数 5学級(うち特別支援学級2)

### 全教員がジグソー法による 授業を実践

安芸太田町教育委員会(以下、町教委)と全6校の町立小・中学校は、2010年度より、CoREFが推進する「新しい学びプロジェクト」に参加している。同プロジェクトでは、CoREFと全国の教育委員会・学校・教員が連携し、知識構成型ジグソー法(以下、ジグソー法)を活用した授業づくりの実践研究を行っている(図1)。参加する教育委員会・学校・教員が作成したジグソー法に関する指導案や教材に加えて、授業中の児童生徒の対話内容や変容、それを踏まえた授業改善の報告などの情報をデータベース化。同プロジェクトの参加者はそれらを閲覧し、授業づくりの参考にしている。参加者約2,000人のメンバーリスト上で、授業実践に関する相談や助言も行われている。

同町の小・中学校は、学期に1回、全教員がジグソー法による研究授業を公開し、学校間で参観し合う。同町立加計中学校の羽村昭彦校長は、ジグソー法を活用するねらいを次の

ように語る。

「本校は1学年20人弱の小規模校です。生徒の人間関係は固定化しやすく、互いに刺激を受け、切磋琢磨することが難しい環境にあります。町内のいずれの学校も同様の状態にあるため、生徒同士の学び合いによって、一人ひとりが様々な気づきを得て変容し、自身の考えの確立につなげられるジグソー法を、授業に導入したいと考えました」

ジグソー法ではまず、エキスパート活動で1つの領域・分野に詳しくなる。次に、異なるエキスパート活動をした生徒が集まって学び合うジグソー活動で、各知識を結びつけて問いの答えを探り出していく。どの生徒にも「話したいこと、聞きたいことがある」状況をつくるため、学力によって固定化された人間関係の影響を受けづらくなると、教務主任の吉田朋子先生は指摘する。

「ジグソー法での学び合いの様子を見ると、学力に関係なく、分からない時には『そこをもう少し詳しく教えて』と聞いたり、相手の発言に違和感を抱いたら、『それはこうだと思



校長  
羽村昭彦  
はむら・あきひこ  
同校に赴任して8年目。



教務主任  
吉田朋子  
よしだ・ともこ  
同校に赴任して9年目。  
国語科。3学年担任。

うけれど、どうかな』と率直に伝えたりしています。ジグソー法の授業を続ける間に、日常の場面でも、生徒たちが自然にやりとりできる関係になっていくのを実感しています」

### 協働学習で仲間の発言を聞き、 個の思考が深まっていく

羽村校長はジグソー法について、「『協働的な学び』であるのと同時に、『個別最適な学び』でもあると認識している」と語る。

ジグソー法では、教員が提示した課題に対して、まず一人ひとりが自力で考える時間が設定される。その

\*1 ジグソーパズルを解くように、協力して全体像を浮かび上がらせる協調学習法の1つ。ある課題について、複数の視点で書かれた資料を読む「エキスパート活動」、そこで得た知識を交換し、考えを深めていく「ジグソー活動」、全体でグループの意見を交換する「クロストーク活動」を経て、個人で改めて課題に向き合う。 \*2 2008年に発足した東京大学の大学発教育支援コンソーシアム推進機構を母体とし、一般社団法人教育環境デザイン研究所を中心とした協調学習の授業づくりの実践研究を支援する、研究者のネットワーク。

上でエキスパート活動、ジグソー活動、クロストーク活動で学び合い、最後に再び個人で課題について考える。一連の活動の中で、個別学習と協働学習が往還しながら進んでいく。それが、生徒の学びを深める大きな鍵になると、羽村校長は話す。

「最初に1人で取り組んだ時点では課題への理解がまだ浅いために、エキスパート活動であまり発言できない生徒もいます。ところが、ジグソー活動で仲間の発言を聞いているうちに、課題に対する理解が深まり、徐々に発言できるようになっていきます。そして、最後に自分の考えをまとめる活動では、最初に取り組んだ時の内容とは見違えるような、深い考察力を働かせた考えを書けるようになります。『協働的な学び』が、個の思考を深めていることを実感しています」

最初は分からなかったことが徐々に分かるようになるといった経験を通じて、生徒には粘り強く学習に取り組む態度も育まれていく。文部科学省「全国学力・学習状況調査」では、同町の児童生徒の無解答率は全国平均より大幅に低く、諦めずに問題に取り組む姿勢が見て取れるという。

### 教員が生徒役の模擬授業で、教科を超えて意見を出し合う

同校では、教務主任や研究主任を含む3人が研究推進委員となり、「新しい学びプロジェクト」の全国のメンバーや、町内の他校の教員と授業づくりの情報を共有し、それを校内に広めている。他の教員はサポートメンバーとして、相談や助言をし合いながら授業研究に取り組む(図1)。

ジグソー法に関する校内研修は、学期に1回行われる研究授業の前に実施。全教員が2つのグループに分かれ、輪番で教員役となり、模擬授

図1 教育委員会、学校による「新しい学びプロジェクト」の連携

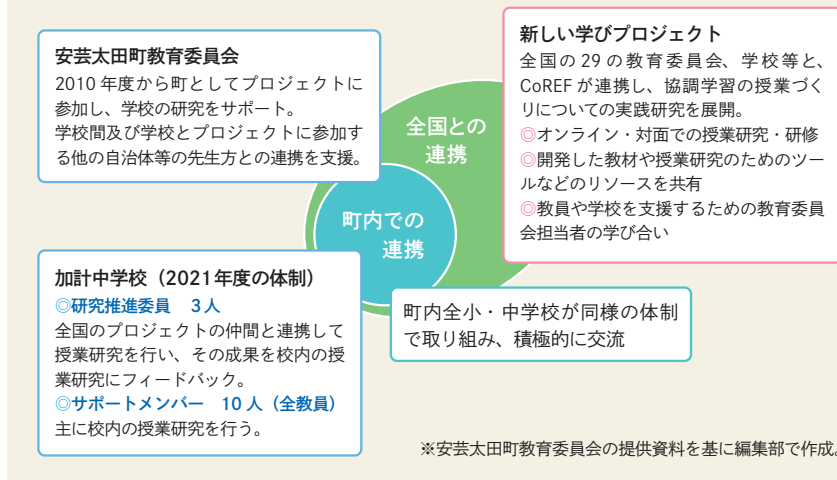


図2 3年生 国語科『高瀬舟』単元計画

1時間目	作品を個人で読み、感想と疑問点をまとめる。
2時間目 3時間目前半	ジグソー法を活用して作品を読解し、「安楽死」について、根拠を基に自分の考えを持つ。
3時間目後半	4時間目に行うエキスパート活動で使用する資料を個人で読解する。
4時間目	ジグソー法を活用して作品を読解し、作品が伝える「足るを知る」この意味を自分の言葉でまとめる。
5時間目	ジグソー法を活用して、芥川龍之介『蜘蛛の糸』『羅生門』『杜子春』を読解し、「人間の愛と欲」について考える。

授業レポート(P.18-19)で紹介したのは4時間目の授業。 ※加計中学校の提供資料を基に編集部で作成。

業を行う。生徒役の教員は、担当教科以外の授業でジグソー法を体験することで、「ジグソー活動で対話を深めるには、エキスパート課題の再検討が必要だ」といった、教科を超えた様々な気づきが得られるという。

「担当教科以外の授業に対して、踏み込んだ発言はしにくいものですが、模擬授業としてであれば、生徒の立場から感じたことを率直に口にできます。最良の授業の方法を、全教員が協力して考えています」(吉田先生)

### 班を組み替えた交流で思考を深める

吉田先生は、担当教科の国語科の授業で、1単元につき2～3回程度、ジグソー法を取り入れている。

3年生の『高瀬舟』(森鷗外)の単元では、全5時間中、ジグソー法による授業を3回組み入れた(図2)。

1時間目は、生徒は自力で作品を読み、感想と疑問点を書いた。

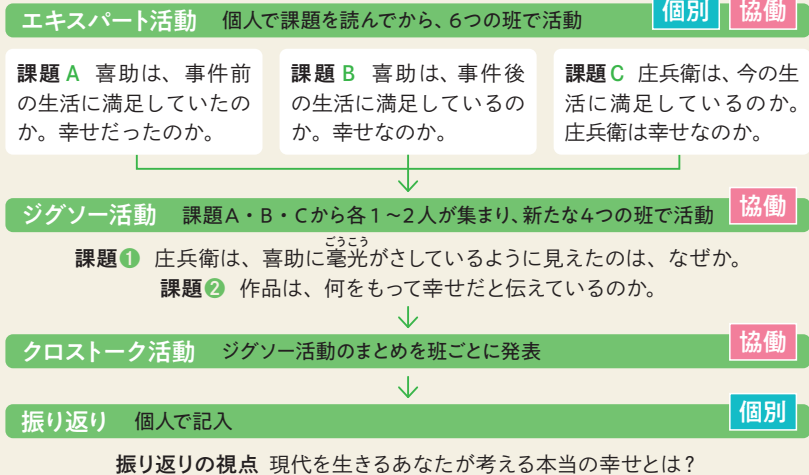
「森鷗外の作品は使われている言葉が難しく、小説の世界にうまく入れない生徒もいます。しかし、最初は作品の説明をあえて行わず、まずは各自で読み、その時点での読解状態を自覚できるようにしています」(吉田先生)

2時間目と3時間目の前半は、作品の重要なモチーフである「安楽死」について、ジグソー法で理解を深めた。3時間目の後半は、次時の「足るを知る」を考える授業で行うエキスパート活動の課題と資料を提示。生徒は自分が担当する課題の資料を読んで自分なりの考えを書いた(P.18図3)。

そして4時間目は、「足るを知る」をテーマにしたジグソー法を行った(授業レポート1～5参照)。まず、本時の課題を確認した後(1)、生徒は担当するA～Cの課題ごとに分かれてエキスパート活動を行い(2)、そこで深めた読解を基に班を組み替えてジグソー活動に取り組んだ(3)。

ある班のジグソー活動では、次のようなやり取りで読解の深まりが見られた。エキスパート活動でAだった生徒が、「事件前の喜助は不満足だったけれど幸せだった」と述べ、その根拠として「弟が自殺しようとした時、食べ物を放り出して駆けつけた」という本文を示した。他の生徒が理解できず、「なぜ食べ物？」とさらに尋ねると、その生徒は「厳しい生活状態にもかかわらず、食べ物を捨てて駆けつけたから」と説明。それにほかの生徒も納得し、「そこまで愛していた弟と一緒に暮らしていたのだから、生活には不満足でも幸せだったのではないか」という理解に至った。

図3 3年生 国語科『高瀬舟』 3時間目後半・4時間目の流れ



※加計中学校の提供資料を基に編集部で作成

### 深い学びの鍵は、クロストークで「でも」を引き出すこと

エキスパート活動やジグソー活動ではICTを活用し、1人1台端末で他班の学び合いの内容も共有。生徒は多様な考えに触れながら学びを進めた。その間、吉田先生は各班の様

子を見て回ったが、活動内容の把握に努め、助言や質問はしなかった。

「以前は理解を深めてほしいという思いから、生徒に助言することもありました。しかし授業後、生徒の発話記録を読み返して、私が介入したことでその後の対話の流れが大きく変わっていたことに気づきました。

## 授業レポート 知識構成型ジグソー法

3年生 国語科『高瀬舟』(本時は、全5時間中の4時間目)

本時の目標 作品が伝える「足るを知る」ことの意味を自分の言葉で語る。

### 1 本時の課題を確認

2分間



吉田先生は、本時に行うエキスパート活動、ジグソー活動の課題を説明。生徒が前時の授業で、自身が担当するエキスパート課題の資料を読んでいることから、「自分なりに考えたことを基に、みんなで話し合ってください」と伝えた。

### 2 エキスパート活動

10分間



A～Cの課題ごとに2～3人ずつの6つの班を組み、エキスパート活動を行った。その内容は端末に入力。画面は他班にもリアルタイムで共有されており、生徒は他班の入力内容を時折見ながら、自分たちの課題について話し合い、理解を深めていった。

### 3 ジグソー活動

18分間



各エキスパート活動から1～2人ずつ集まって新たな4つの班を組み、ジグソー活動を行った。「もう少し踏みとどまって考えてみよう」と粘り強く考えたり、「本文にはこう書いてあるから違うのでは？」と根拠を示したりしながら議論した。

教員の発言が生徒の思考に与える影響は大きく、生徒が自分たちの力で読解を深めようとするのを妨げる恐れがあると考え、以降、見守りに徹しています」(吉田先生)

吉田先生は、教員に適切な問いかけが求められるのは、ジグソー活動への答えを発表するクロストーク活動の場面だと語る(4)。

「一度まとめた考えを問いかけによって突き崩し、さらに深い思考に導くようにしています。突き崩しは、生徒同士でも可能です。例えば、あえて課題に対する考察が十分に深まっていない班から発表を始めると、他の班の生徒は、『でも、こういうことも言えるのでは?』と疑問を抱きます。生徒自身で考えをより深めていける『でも』を、引き出すことを重視しています」

本時の振り返りでは、「自分の考える幸せ」について端末に入力(5)。生徒は、「本当の幸せとは、普通の生活を送れることだと思う。でも、人

間は欲深い生き物だから、それで満足しない。だからこそ、幸せ(普通の生活)ではなくなった時、それが本当に幸せだったと感じられると考えた」などと入力していた。初読ではあらずじすら追えなかった生徒も、「協働的な学び」を重ねる中で理解が深まり、作品が伝える「足るを知る」の意味をつかみ、自分の考えを表現できるようになっていた。

「ジグソー法では、活動は基本的に生徒に委ねられ、教員がかかわる場面は限られます。だからこそ、自分1人では簡単に答えを出せないけれども、対話を積み重ねる中で答えに近づいていけるような課題設定が重要です。その時点での生徒の学力や状況を十分に把握した上で、適切な課題を提示することを意識しています」(吉田先生)

そうして「幸せ」について考えを深めた後、5時間目は芥川龍之介の作品について、「人間の愛と欲」をテーマにジグソー法で読解する予定だ。

### 生徒の対話を分析し、授業づくりに活用

同町の小・中学校は、2021年度より文部科学省の研究事業\*3の指定を受け、授業中の児童生徒の発話を録音し、自動的にテキスト化できるシステムを導入した。各学校では、対話の中に多く出てきたキーワードや、対話の中で起きた発言の変容に関する分析などを行っている。

同校もそのシステムを活用することで、生徒の学びの様子をこれまで以上に詳細に見取れるようになった。今後は、授業改善をより効果的にしていきたいと考えている。

「生徒が自らの力で変容していく姿に触れるのは、私たち教員にとっても大きな喜びです。本校は教員数が少なく、全学年の授業を受け持つ教員が大半です。授業準備などで忙しいではありますが、これからも学校一丸となって、丁寧な授業づくりに取り組んでいきます」(羽村校長)

個別 : 個別学習

協働 : 協働学習

#### 4 クロストーク活動 (1)発表

#### (2)教員の問いかけ

12分間



吉田先生は「ジグソー活動の課題①はできたけれど、②の答えはまだ見つからない班はある?」と尋ね、手を挙げた班から発表を促した。ジグソー活動で端末に入力した内容をスクリーンに映し出しながら、各班の代表者が順次発表していった。



ある班の発表に、吉田先生は「1つは欲がないことが幸せ、もう1つは今あるものに満足することが幸せと言ったけれども、欲を持たないことは、幸せなのかな?」と問いかけた。生徒が「違う」と答え、「どう違うのかな?」と問いを重ねていった。

#### 5 本時の振り返り

8分間



本時の振り返りとして、「現代を生きるあなたが考える本当の幸せとは?」について、各自の考えを端末に入力した。入力した内容は各自の端末で共有されており、「私とは違う考えで、面白いですね」と、生徒はコメントを送り合っていた。

\* 3 安芸太田町教育委員会は、2021年度、文部科学省「新時代の学びにおける先端技術導入実証研究事業」(学校における先端技術の活用に関する実証事業)に指定された。

## コロナ禍でも体力・運動能力向上のために

# 遊びを通じて健康的な身体づくりを

「令和3年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の結果では、小・中学生の男女ともに令和元年度の同調査より「体力合計点」が低下し、男子は小・中学生ともに過去最低となった。コロナ禍で体育の授業以外での体力向上の取り組みが減り、運動不足による体力低下に拍車がかかる中、教育委員会と学校、地域が連携し、子どもの体力・運動能力の低下とどのように向き合っていくべきかを考える。

### 提言

## 運動と遊びを“楽しむ”ことで、健康的な身体づくりを可能に

山梨大学 理事・副学長

**中村和彦** なかむら・かずひこ

山梨大学教育学部教授、同大学院教育学研究科長などを経て現職。専門分野は、発達障害学、保健体育科教育学。文部科学省や日本スポーツ協会、日本レクリエーション協会などの各種委員を歴任するとともに、NHK教育テレビ「からだであそぼ」「おかあさんといっしょ」の監修や、ヒット曲「パブリカ」のダンスの監修など多方面で活躍。著書に『「パブリカ」を踊ると子供の運動能力は上がる』（マキノ出版）など。



### 子どもの体力・運動能力の課題

#### 体力・運動能力の向上は健康的な身体づくりにも重要

長引くコロナ禍において、運動機会の減少による子どもの体力低下が懸念されています。しかし、子どもの体力・運動能力の低下は、ずっと前から問題視されてきました。

日本で最初のオリンピックが行われた1964年から毎年、「体力・運動能力調査」(全国体力テスト)<sup>\*1</sup>が行われています。初めの20年間は上昇基調でしたが、1985年頃をピークに男女とも全学年で合計点が下がり始め、2000年までの約15年間で現行方式の合計点<sup>\*2</sup>に換算して13～15ポイントも低下。以後は、ほぼ横ばいです。

近年の調査結果でボール投げの平

均値が大幅に下がったため、「投能力の向上に力を入れるべきだ」といった議論もなされています。しかし、1980年代半ばからの15年間で、走・跳・投のすべての能力が低下しており、種目別の数値にこだわることに意味はありません。例えば、子どもに毎日ハンドグリップを握らせれば、握力だけは確実に強くなります。重要なのは、走・跳・投の力をバランスよく身につけることです。そして、何よりも子どもが元気で、「身体を動かすことが好きになる」ことが大切です。

体力・運動能力の低下は、健康や生活習慣の悪化につながります。風邪やインフルエンザなどの感染症の罹患率が高まっていますし、肥満傾向児が増えて(図1)、生活習慣病になる小学生も少なくありません(図

2)。また、転んだ際に地面に手をつけられずに大ケガをしたり、ボールをキャッチできずに目にあって眼球を損傷してしまったりといった例もあります。発達段階に応じた体力や運動能力を身につけることが、子どもの健康にとっても重要なのです。

さらに、身体を動かす遊びは、子ども同士でルールを考えたり、人とかかわり方を学んだりする機会にもなります。創造性やコミュニケーション能力などの非認知能力を育むこともできるのです。

### 体力・運動能力低下の原因

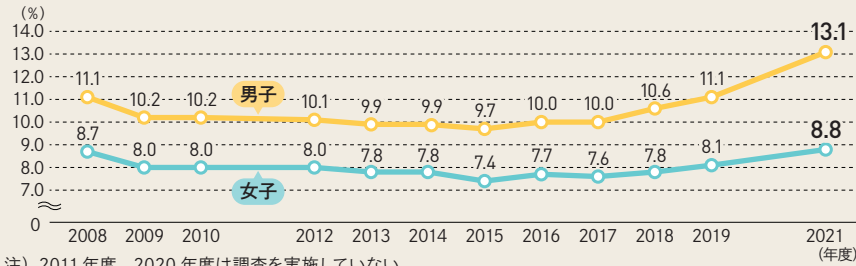
#### 子どもが遊べる場や機会を奪ったのは「大人の都合」

現在は昔に比べて、外で遊ぶ機会

\*1 1999年、テスト項目などが見直され、現在の形になった。 \*2 現行の方式では、「50m走」「立ち幅とび」など、8種類のテスト項目の結果を各10点満点とした合計80点。

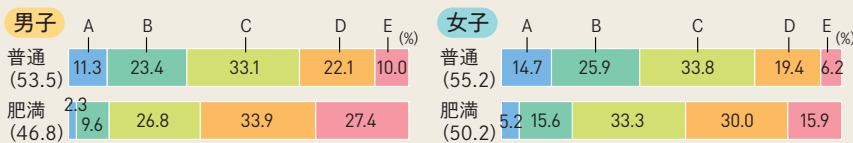
図1 〈小学校〉肥満と運動の関係

◎肥満傾向児の出現率（経年変化）



注) 2011年度、2020年度は調査を実施していない。

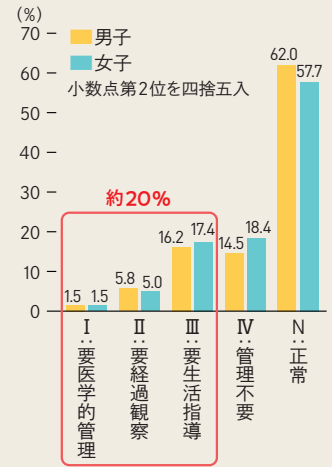
◎体格別の総合評価の割合（2021年度）



注) 総合評価は、各実技テストの結果を10点満点で換算し、合計80点満点で、A(65点以上)、B(58～64点)、C(50～57点)、D(42～49点)、E(41点以下)を判定。( )内の数値は、総合評価の平均点。

※スポーツ庁「令和3年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査」を基に編集部で作成。

図2 〈小学校〉小児生活習慣病予防健診 総合判定・指導区分の出現率（2019年度）



※公益財団法人東京都予防医学協会「東京都予防医学協会年報2021年版第50号」を基に編集部で作成。

が減り、嗜好品を好み、ゲームなどで遊んで夜遅く寝る傾向が強いため、朝早く起きられず、朝食を食べず、排泄もしないまま登校するといった負の連鎖が起きています。それが、子どもの体力・運動能力の低下や生活習慣病をもたらす原因の1つになっています。

「今の子どもは、自分たちだけで遊べなくなった」と大人は言いますが、子どもの遊びの場や機会を奪ったのは「大人の都合」です。

例えば、昔は路上でも遊べましたが、車社会化が進み、大人の都合で「道路で遊んではいけません」という標語ができました。約20年前から、道路での遊びについて海外での状況を調べていますが、道路で遊んではいけないという標識を示しているのは日本くらいです。イギリスなどでは、「道路で子どもが遊び始めたら、車は通ってはいけない」というのが共通認識です。

また地方では、小・中学校の統廃合が進み、スクールバスが家の近くまで送迎してくれるようになったことで、子どもの歩く機会は激減しています。

都市部には、小さな公園が点在していますが、使用ルールの掲示を見ると、一般にボール遊びやバット振り、自転車・一輪車などが禁止されている上に、「大きな声を出してはいけない」「近所に迷惑をかけてはいけない」など、近所に住む大人の都合によるルールが書かれています。これでは、子どもたちが公園で思い切り遊べません。

塾や習い事が増えて、遊ぶ時間そのものも減っています。交通事故や不審者に遭う危険性も高まっているので、家にいさせた方が安心という保護者もいます。

さらに、運動をする子としない子の二極化も進んでいます。日常的に運動をしている子どもは、地元のスポーツクラブやスイミングスクールなどに参加している場合がほとんどです。月謝がかかる場合もあり、経済的理由で参加できない子どももいます。経済格差も、子どもから運動の機会を奪っているといえるでしょう。

そのように、多くは「大人の都合」で子どもが遊べない状況がつけられているのです。

日本の競技スポーツの課題

幼少期に運動を楽しめると、「持ち越し効果」が大人まで続く

スポーツ系の習い事にも、懸念点があります。スポーツは本来、身体を動かす「喜び」を感じるためのものです。ところが、今の日本のスポーツは、「競技」の傾向が強くなり、練習についていけなくなったり、本人の意思に反したことをやらされたりして、子どもがスポーツの楽しさを味わえていないケースが見られます。

幼少期にスポーツの楽しさや面白さを感じた子どもは、大人になっても運動を続ける傾向があり、それを「持ち越し効果」と呼んでいます。しかし、やらされ感が残ったまま途中でスポーツをやめたり、練習に燃え尽きたりしてしまうと、「持ち越し効果」は得られにくくなります。生涯にわたって運動を楽しむ姿勢を育むためにも、幼少期にスポーツを楽しむ経験が大切です。

日本では、中学校・高校の部活動に見られるように、特定のスポーツに取り組む傾向があります。ところ



写真1 0～12歳児が利用できる「おしろらんど」（子どもの利用料金90分間300円）は、年齢別・機能別のゾーニングによって、「楽しさ」と「安全性」を確保している。写真のアクティブエリアには、走る・跳ぶなど、幼児期の成長に必要な36の基本動作を引き出す仕掛けがある。

が、幼い頃からのスポーツへのかかり方が偏っていると、多様な身体の動かし方が身につきません。運動能力の偏りを生み、「野球肩」や「テニスひじ」といったスポーツ障害を起すこともあります。

一方、欧米には、特定のスポーツのみに取り組む団体はほとんどありません。例えば、アメリカでは、スポーツ障害を防ぐため、小学生以下のスポーツクラブでは3種目以上のスポーツを行うように定められています。

また、日本の部活動では、「学校代表」として大会に出場しますが、多くの国では、「地域代表」として地域のユニフォームを着て大会に出場します。それは、学校と地域が連携して、子どもの運動能力の育成に取り組んでいるからです。学校では、「身体の動かし方などの理論」を学び、それを「実践」するのは地域というのが世界の主流ですが、日本ではスポーツに関して学校と地域との接点がほとんどありません。実際、部活動の顧問教員と地域スポーツの指導者が、それぞれどのような指導を行っているのかを把握できていない場合が多いのではないのでしょうか。

中学校・高校において、レクリエーション的な運動部があってもよいと

思います。文化部に所属する生徒や、いわゆる帰宅部の生徒でも、たまにはスポーツをしたいと思うでしょう。野球部の生徒と吹奏楽部の生徒と一緒にサッカーを楽しんでもよいはずですが。競技志向ではない子どもでも気軽にスポーツを

楽しめる仕組みがあるとよいと思います。

子どもが遊ぶ様子を見ると、サッカーもするし、鬼ごっこや縄跳びもする。時には魚釣りだってしたい。そして、その根底には、必ず「楽しい」「面白い」といった気持ちがあります。

#### 学校・教育委員会の役割

### 重要なのは、プレイリーダーと、遊びの機会・場所の確保

遊びの習慣が消えつつあるのなら、誰かが伝えなければなりません。競技スポーツと異なり、「遊び」は指導するものではありません。指導した瞬間に遊びではなくなります。

そこで重要となるのが、子どもの遊びを支援する「プレイリーダー」（P.24・25参照）の存在と、遊びや運動の機会・場所の確保です。

ある小学校では、教員が縄跳びや相撲遊び、ビー玉遊びなど、自分の得意な遊びの「お店」を開き、子どもと一緒に楽しむ活動を行っています。最初は教員が遊び方を教えますが、上級生が下級生に教えることができるようになると、徐々に子どもたちに任せていきます。

別の小学校では、昼休みの時間を延ばしたり、掃除の時間を週1日は

遊びの時間に充てたりしています。スクールバスも、時には学校の1km手前で降ろし、そこから歩いて集団登校する方法も考えられます。

日本では、子どもを交通事故から守るため、朝の通学時間帯にスクールゾーンを設定しているところが多いですが、朝の通学時に遊ぶ子どもはほとんどいません。むしろ、下校の時間帯にこそスクールゾーンを設けて、地域の方々との交流も含めて、安心して「道草を食える」ようにしてはいかげでしょうか。

私は、山梨県甲府市とともに、世界中の優れた遊び道具を提案する玩具会社と連携し、子どもが夢中で遊びながら体力づくりのできる「運動遊び」の拠点を甲府市内につくりました。2021年4月開設の屋内子ども運動遊び場「おしろらんど」です（写真1）。そこでは、保護者も子どもと一緒に遊べるようにしています。保護者に遊びの楽しさを感じてもらうとともに、遊んでいる時の子どもがいかに生き生きとしているかを、間近で見てほしいからです。

また、福島県郡山市では、教育委員会と子育てNPO法人、企業が協働し、遊具施設「ベップキッズこおりやま」を運営しています。プレイリーダー約20人が子どもと一緒に遊ぶほか、地域の小学校や幼稚園の教員、保護者を対象に遊びの研修会も開いています。

スポーツの語源は、日常生活から離れるための「気晴らし、遊び、楽しみ」などを意味するラテン語の「deportare」といわれています。子どもの健康的な身体づくりと生活習慣の改善のために、教育委員会では、どのように運動・スポーツと向き合っていくべきかを考え、学校現場を支援していただければと思います。

実践  
事例ガイドブックを基に、プレイリーダーが遊びの場を支援  
早起き推進で生活習慣を見直し、健康的な身体づくりを実現  
東京都昭島市 教育委員会、昭島市立<sup>こうか</sup>光華小学校

## 東京都昭島市 プロフィール

◎ 1954年、昭和町と拝島村が合併して誕生。東京都のほぼ中央に位置する。近世は、拝島宿を中心に日光街道の宿場町として栄えた。多摩地区の中核を担う都市として、「人間尊重」と「環境との共生」を基本理念とした街づくりを目指す。

人口 約11万3,800人 面積 17.34km<sup>2</sup> 市立学校数 小学校13校、中学校6校  
児童生徒数 約8,000人 電話 042-544-5111 (代表)

## 昭島市立光華小学校 プロフィール

◎ 1953(昭和28)年、昭<sup>せいりん</sup>和町立成隣小学校分校として開校。学校教育目標は、「健康な子・考える子・すすんでする子・協力する子」。2019年度、東京都教育委員会「子供の体力向上推進優秀校」に選定された。

校長 鶴川雅行先生 児童数 481人 学級数 16学級 電話 042-541-0313



昭島市教育委員会 事務局  
学校教育部 指導課  
統括指導主事

佐々木光子

ささき・みつこ



昭島市教育委員会 事務局  
学校教育部 指導課  
指導主事

水谷延広

みずたに・のぶひろ



昭島市立光華小学校  
副校長

眞砂野 裕

まさの・ゆたか

遊びの「時間・空間・仲間」を  
子どもたちの元へ

5時間目終了のチャイムが鳴り、低学年の児童が下校を始める時刻。子どもたちは、校門とは逆方向にある遊具スペースの片隅にランドセルを置いて校庭で遊び始める。巨大なゴムボールを追いかけたり、竹馬や一輪車に乗ったり。プレイリーダーと一緒にゴム遊びを楽しむ子どももいる(写真2)。15時過ぎには、中・高学年の子どもたちも校庭に出てきた。



写真2 ゴムを使った様々な遊びを工夫して楽しむ子どもたち。プレイリーダーは、他のグループの子どもたちにも目配りしながら遊びを支援していた。

学年を超えて遊びの輪が広がり、あちこちで大きな歓声が飛び交う――。

昭島市立光華小学校では、昭島市教育委員会(以下、市教委)の支援の下、放課後に行う運動遊びの時間「元気アップタイム」を週1~2回、設けている。取り組みを主導する眞砂野裕副校長は、次のように抱負を語る。

「何よりうれしいのは、子どもたちの笑顔がとても輝いていることです。この先もずっとこの光景が見られるように取り組みを受け継ぎ、本校の

レガシーとして根づかせることが使命だと考えています」

昭島市は、スポーツ庁委託事業「学校における子供の体力向上課題対策プロジェクト」に応募し、指定を受けたことをきっかけに、子どもの体力向上・健全育成の施策に、一層力を入れるようになった。

た。同市では、「体力・運動能力調査」の結果が低迷していたが、同調査の数値の向上ではなく、子どもの健やかな身体づくりを施策の第一の目標とした。本施策の根底にあるのは当時、中村和彦教授から教わった、遊びの「時間・空間・仲間」という3つの「間」を大切に、という考えだ。市教委の水谷延広指導主事は、施策のねらいを次のように語る。

「遊びを通して日常的に身体を動かし、楽しめるようにすれば、結果として元気な身体がつくれます。そうすればおのずと、『体力・運動能力調査』の数値も上がると期待しました」

多様な身体の動きを  
取り入れた「運動遊び」を提唱

市教委は、2016年度から2年間かけて、「元気アップガイドブック」を作成。市を挙げて運動遊びを通した

体力・運動能力の増強と、生活習慣の改善に着手した。

2017年度には、昭島市立成隣小学校が、東京都教育委員会「アクティブライフ研究実践校」の指定を受けて、「元気アップタイム」の原型となる、プレイリーダーによる運動遊びを開始。その成果を踏まえて、2018年度から順次、すべての市立小学校が放課後の「運動遊び」を開始した。

取り組みの中核となるのが、「元気アップガイドブック」だ。保健分野と、発達分野を専門とする2人の大学教授の監修・指導の下、市教委や眞砂野副校長を含む体育研究会のメンバーが、小学校版と中学校版を製作し、全児童生徒に1冊ずつ配布している。

同冊子では、様々な運動遊びの身体の動かし方をイラスト入りで説明。①「柔らかさ」を高めるストレッチ、②「動作のうまさ」を高める遊び（ボールやフラフープ、ゴムを使った遊びなど）、③「持久力」を高める遊び（連続してのダンスや長縄跳びなど）、④「力強さ」を高める遊び（綱引きや手押し車など）と、身体の動きを4つに分類し、それぞれに適した運動遊びを紹介している。

また、4つの身体の動きに対して、保健体育科の授業とかかわりが深い領域・単元と、「体力・運動能力調査」に関連する種目を示している。市教委の佐々木光子統括指導主事は、そのねらいを次のように説明する。

「自分たちが行っている遊びが、身体の発達とどのように関係しているのかを示すことで、身体を動かす意義を理解できるようにしました。保健体育科の授業で、ウォーミングアップとして、これらの運動遊びを活用している小学校もあります」

## 学習支援員や教員志望の学生がプレイリーダーとして活躍

「元気アップガイドブック」で提唱している運動遊びを、最もよく活用しているのが、冒頭で紹介した放課後の「元気アップタイム」だ。各学校で委託している1～3人のプレイリーダーが、ガイドブックの中からその日に行う種目を選び、放課後になると、竹馬や長縄、コーンなど、4つの身体の動きにかかわる道具を校庭にバランスよく配置する。

プレイリーダーは、授業の学習支援員や、教員養成系・体育系大学の学生などが務める。光華小学校のプレイリーダーも、2人が学習支援員、1人が小学校教員志望の大学生だ。学習支援員は普段から子どもたちと接し、個々の特性もよく知っているため、子どもとの遊びに溶け込みやすい。また、教員志望の学生にとっ

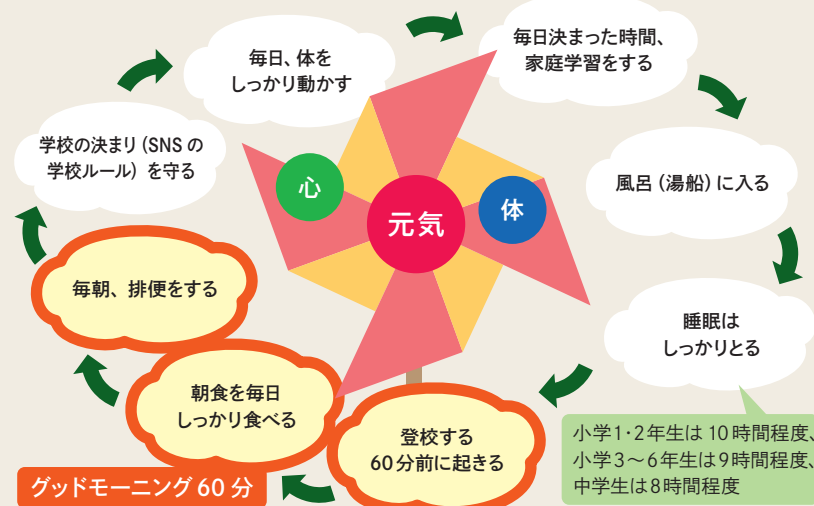
ては、子どもとの交流がインターンシップのような機会になっている。

プレイリーダーは学校ごとに募集している。スポーツ庁委託事業の指定期間終了後は、東京都市長会などが実施する「多摩・島しょスポーツ習慣定着促進事業助成事業」に参加し、ガイドブックの製作やプレイリーダーへの手当てにかかる予算を確保。各小学校に助成金として均等に配分している。

「元気アップタイム」は登録制で、無料で参加できる。光華小学校では全校児童の約4分の1にあたる120～130人が、ほぼ毎回利用している。なお、教員もプレイリーダーとして運動遊びに加わることが多い。

『「元気アップタイム」』は、教員にとってほっとする時間です。教室とは違う子どもの姿を見ることもあり、子どもとの距離を縮めていくよい機会になっています」（眞砂野副校長）

図3 「元気をつくる8つのポイント」



上図は、「元気アップガイドブック」に掲載したもので、十分な睡眠→早起き→朝食→排便……というように、1日の流れを風車になぞらえ、1枚の羽根に風をあてれば風車が回り出すように生活リズムを整えられるという「風車理論」を基にしている。「グッドモーニング60分」は、風車理論を踏まえた取り組みで、起床から登校までに60分間を確保することで、眠気を感じにくく、朝食や排便の習慣が定着し、学力・体力・気力の充実につながられるという考えだ。

※昭島市教育委員会の提供資料を基に編集部で作成。

## プレイリーダーの役割は 遊びの多面的な支援

同校の「元気アップタイム」では、子どもたちがやりたいことや、自分たちで考えた遊びをできるだけ尊重している。そのため、子どもたちがプレイリーダーや教員の想定を超えた動きを見せることも少なくない。自然と異学年の交流が生まれ、上級生が下級生に配慮して、ボールを投げる位置を的に近づけるなど、遊びのルールを柔軟に変更する場面もあるという。また、プレイリーダーが「片づけようか」と言えば、子どもたちは競い合って道具をしまい、後片づけも遊びの1つにしてしまう。

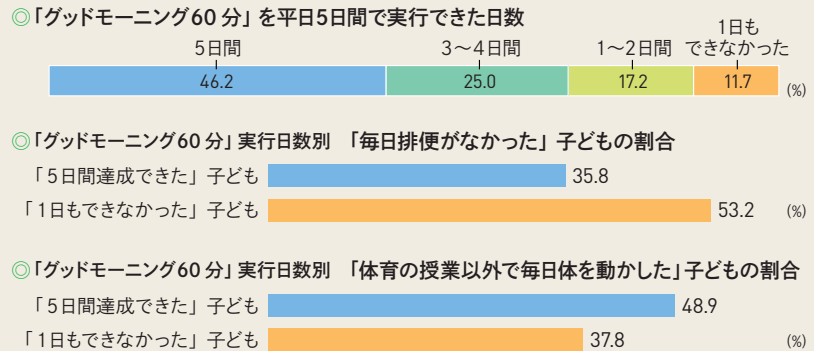
プレイリーダーには、安全を見守る「ウォッチャー」、子どもと遊ぶ「プレイヤー」、子ども同士の関係を調整する「コーディネーター」、さらに「ファシリテーター」として遊びをさらに面白くするアイデアを出すなど、多面的な支援が求められる。

「遊びの主体は、子どもです。プレイリーダーは必要以上に介入せず、子どもが遊び始めたら一歩下がって全体を見渡し、事故がないように視野を広げています。子どもが主体という意味では、『主体的・対話的で深い学び』と似ています。『深い学び』に誘うヒントが、この活動の中にあるかもしれません」（真砂野副校長）

## 「グッドモーニング60分」で 規則正しい生活習慣を定着

市教委は、体力・運動能力の向上につながる取り組みとして、まずは登校60分前に起床する「グッドモーニング60分」の活動を奨励し、生活習慣の改善も進めている。それは、朝早く起きれば“心”と“体”が元気に

図4 「グッドモーニング60分」の実施状況と成果（2020年度）



※昭島市内養護教諭の調査結果を基に編集部で作成。

なり、おのずと様々な生活リズムが整うという「風車理論」に基づく取り組みだ（図3）。「元気アップガイドブック」でも、朝食・排便習慣の定着、睡眠不足の解消、学力・体力・気力の充実など、登校60分前の起床による利点をデータとともに示した。

登校60分前に起きるためには、家庭の協力が欠かせない。そこで、保護者向けのリーフレットを作成して全家庭に配布したり、PTA広報誌で特集を組んだりして周知した。夏季休業中に毎日の生活状況を記入する「生活カード」にも、全市立小学校統一で、「グッドモーニング60分」の達成度を記入する欄を設けた。そして、保護者には「登校60分前の起床」に絞って協力を求めることで、負担を最小限に抑え、子どもに声をかけやすいようにした。

「早寝・早起き、排便、運動など、多くを求めないようにすることで、学校が保護者にお願ひしやすくなり、結果的に家庭に広く浸透しました。特に、2020年度の臨時休業の際には、子どもの生活習慣が乱れがちになったため、保護者からは、『グッドモーニング60分』で注意を促していたといった声もよく聞かれました」（真砂野副校長）

実際、「好きな曲や匂いで起こした」「一緒にピアノを弾いたり、散歩をしたりした」など、朝の60分が家族で楽しむ時間になっているという。

「グッドモーニング60分」の効果は、データにも表れている。市内養護教諭が5日間、「グッドモーニング60分」の実施状況について調査したところ、「5日間達成できた」と回答した子どもは、朝食・排便習慣が定着しており、保健体育科の授業以外でも運動する割合が高かった（図4）。

同市の今後の課題は、中学校での体力・運動能力の増強だ。現在、小学生男女や中学生男子の「体力・運動能力調査」の結果は都の平均をおおむね上回っているが、運動部に所属しない中学2・3年生の女子は平均以下で、対応策が必要だ。また、部活動の改革も課題の1つだという。

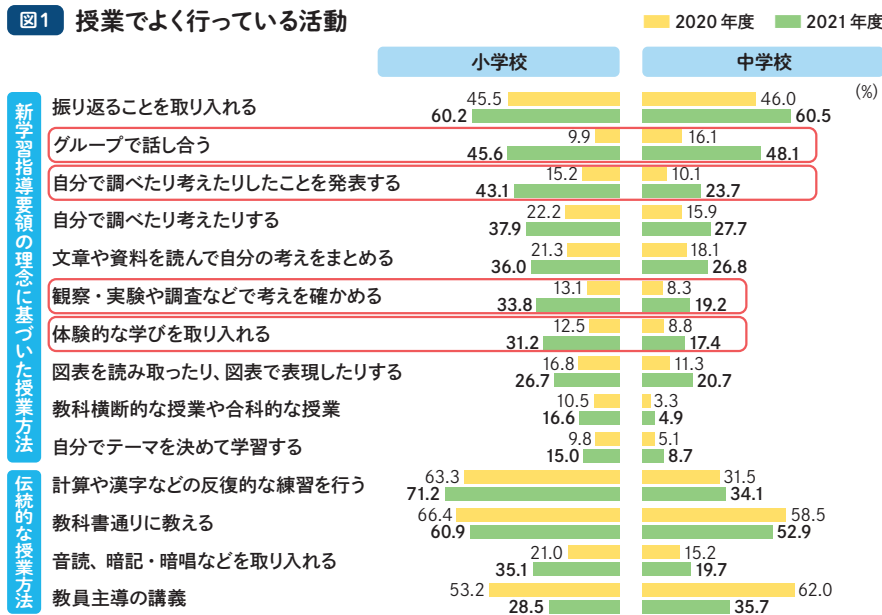
「部活動の活性化や顧問の負担軽減を図るため、各競技に精通した部活動指導員を増員したいと考えています。また、スポーツ庁などが提唱している『多様なニーズに応じた部活動』も検討中です。普段スポーツをしない生徒も気軽に参加できる柔軟な部活動のあり方を模索し、子どもたちの運動機会を増やしていきたいと考えています」（水谷指導主事）

# 小・中学校での「協働的な学び」の実施状況

小学校では2020年度から、中学校では2021年度からスタートした新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」が求められている。その理念に基づいた授業はどれくらい実施されているのか。「協働的な学び」に着目して、小・中学校での実施状況を見ていく。

## 1 話し合いや発表など、新学習指導要領の理念に基づく授業方法が広く浸透

図1 授業でよく行っている活動

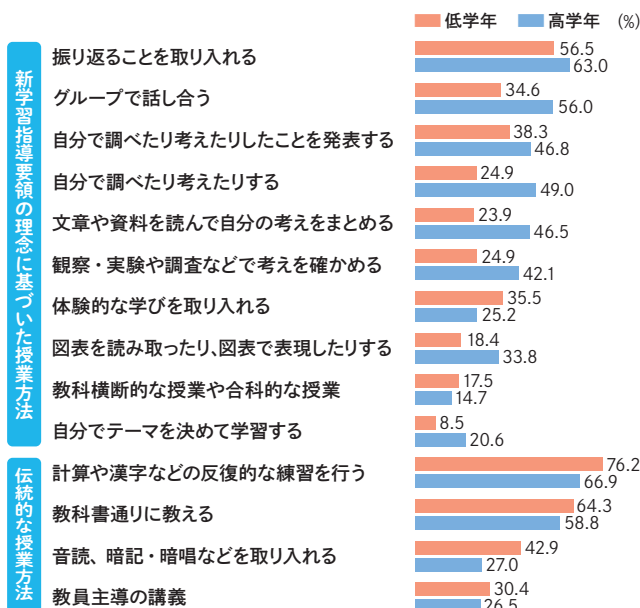


授業でよく行っている活動は、小学校では「伝統的な授業方法」がまだまだに多いものの、2021年度は2020年度に比べて、コロナ禍の影響を大きく受けたであろう「グループで話し合う」は、小・中学校ともに大きく伸びた(図1)。そのほか、新学習指導要領の全面実施が先行した小学校においては、「協働的な学び」につながる「自分で調べたり考えたりしたことを発表する」「観察・実験や調査などで考えを確かめる」「体験的な学びを取り入れる」といった活動(図1の赤枠)も大幅に増えた。

一方、実施率が大幅に減少したのは、「教員主導の講義」だ。授業は教員主導から学習者主体へと変容しつつあり、教員間に新学習指導要領の理念が浸透しつつある様子がうかがえる。

注)「よく行っている」と回答した割合(%)。回答数は、小学校は2020年度1,218人、2021年度2,125人、中学校は2020年度2,151人、2021年度2,264人。

図2 〈小学校〉低学年と高学年の比較



注)「よく行っている」と回答した割合(%)。回答数は、低学年934人、高学年1,058人。

図3 〈中学校〉教科別の比較

	国語 (400人)	社会 (426人)	数学 (519人)	理科 (420人)	外国語 (400人)
グループで話し合う	57.8	38.7	39.1	56.2	52.8
自分で調べたり考えたりしたことを発表する	30.5	26.5	16.8	25.2	20.5
観察・実験や調査などで考えを確かめる	6.3	4.7	6.0	76.2	4.5
体験的な学びを取り入れる	6.0	4.2	6.0	48.6	16.3

注1)「よく行っている」と回答した割合(%)。

注2) 各項目で最も多い割合を緑の地色、最も少ない割合を赤の地色で示した。

小学校において、低学年と高学年の授業方法を比較すると、「伝統的な授業方法」は低学年の方がよく行っており、話し合いや発表といった「協働的な学び」は、高学年の方がよく行っていることが分かる(図2)。低学年は、基礎・基本の定着をより重視しているためと考えられる。

中学校では、どの教科も話し合いや発表はしっかり行っているが、数学科が、他教科に比べるとやや低い(図3)。数学科の授業でも、お互いに自分の考えについて議論したり、発表したりすることで、数学的な考え方や論理的な思考を深めたい。

## 出典 「小中学校の学習指導に関する調査 2021」

新学習指導要領が全面実施され、GIGA スクール構想が前倒しされた中、コロナ禍での小・中学校における学習指導の実態と教員の意識を明らかにすることを目的として、全国の公立小・中学校の教員を対象に実施した調査。調査期間は、2020年・2021年とも8～9月。

◎詳細は下記ウェブサイトをご覧ください。

<https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=5694>

## データ解説

ベネッセ教育総合研究所  
主任研究員

邵 勤風 しょう・きんふう



子ども・保護者・教員の意識や実態に関する調査研究を担当。近年、子どもの主体的な学びを支える学び方や、周囲の支援に関心を持ち、学び方に関する理論研究や実証研究に取り組む。

# 2 新学習指導要領の理念に基づく授業を行う有効なツールとして、ICTを活用

図4 〈小学校〉教職経験年数別の比較

	5年目以下 (507人)	6～10年目 (521人)	11～20年目 (642人)	21～30年目 (275人)	31年目以上 (180人)		
新学習指導要領の理念に基づいた授業方法	振り返ることを取り入れる	55.6	59.1	65.0	62.2	56.7	
	グループで話し合う	45.6	48.6	48.9	41.5	31.7	
	自分で調べたり考えたりしたことを発表する	42.4	44.9	43.3	43.6	38.3	
	自分で調べたり考えたりする	35.7	40.5	40.5	36.0	30.6	
	文章や資料を読んで自分の考えをまとめる	27.4	40.7	39.7	34.5	36.1	
	観察・実験や調査などで考えを確かめる	28.6	34.9	38.9	31.6	30.0	
	体験的な学びを取り入れる	29.6	27.3	32.6	36.4	33.9	
	図表を読み取ったり、図表で表現したりする	21.1	30.5	29.8	25.1	22.8	
	教科横断的な授業や総合的な授業	16.6	13.2	17.4	20.0	18.3	
	自分でテーマを決めて学習する	14.6	16.5	15.7	13.5	11.7	
	伝統的な授業方法	計算や漢字などの反復的な練習を行う	68.8	67.6	72.9	74.9	76.1
		教科書通りに教える	59.8	55.7	62.6	67.6	62.8
音読、暗記・暗唱などを取り入れる		34.1	30.3	35.2	41.5	41.1	
教員主導の講義		24.9	25.9	28.2	36.0	35.6	

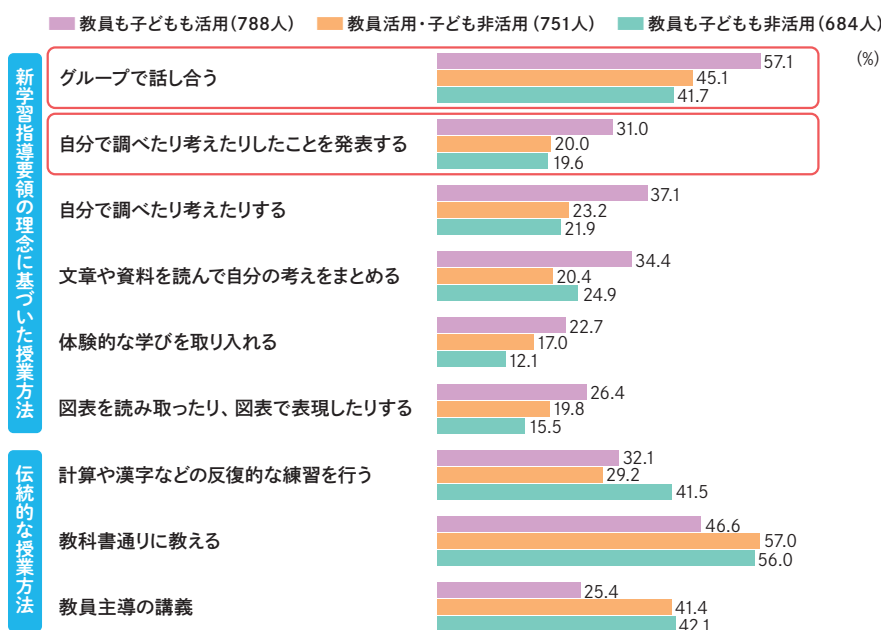
注1) 「よく行っている」と回答した割合(%)。  
注2) 各項目で最も多い割合を緑の地色、最も少ない割合を赤の地色で示した。

## 経験年数やICT活用度で授業方法に違い

教職経験年数別に授業方法を比較してみると、小学校では「6～10年目」「11～20年目」の中堅からベテランの教員ほど、「協働的な学び」や思考力を育成する授業方法を取り入れていた(図4)。一方、「21年目以上」の教員は、「伝統的な授業方法」で授業を行っている傾向が見られた。図示していないが、中学校でも同様の傾向が見られた。

授業での教員と子どものICT活用度別に授業方法を比較したのが図5だ。中学校では、「教員も子どももICTを活用」している群ほど、話し合いや発表などの「協働的な学び」を行っている割合が、「教員も子どもも非活用」の群に比べて10ポイント以上高かった。逆に、「教員も子どもも非活用」の群は、「伝統的な授業方法」で授業をする割合が高い傾向にあった。図示していないが、小学校でも同様の傾向が見られた。

図5 〈中学校〉ICT活用度別の比較



注1) 「よく行っている」と回答した割合(%)。注2) 最も多い割合と最も少ない割合の差が10ポイント以上の項目のみ掲載。注3) 教員と子どもについて、それぞれ「半分程度の授業」～「毎回の授業」での活用を「活用」とし、「2～3割程度の授業」～「全くない」を「非活用」とした。その上で、教員と子どもの活用を組み合わせると4分類にした(「教員非活用・子ども活用」は人数が少ないため、分析から除外)。

## さらなるICT活用の支援を

調査結果から、多くの学校において、新学習指導要領の理念に基づく授業方法がこの1年間で浸透し、それを行う有効なツールとしてICTが活用されている様子が見えた。多くの公立小・中学校で1人1台端末が配備された「GIGAスクール構想」の成果の1つと言えるだろう。

一方で、学齢・教科や教職経験年数などによって、新学習指導要領の理念に基づく授業方法の実施率には差があった。「協働的な学び」のツールとなるICTをさらに活用できるよう、教育委員会には、教員研修や実践事例の共有などを通じて学校を支援し、子どもの資質・能力の育成につなげていくことが期待される。

# フロントランナーに聞く 教育のnext 第6回

新型コロナウイルス感染症の世界的な流行など、予測困難な社会が現実のものとなった今、未来の社会を築く子どもたちの教育を、どのように描いていけばよいのでしょうか。本連載では、教育の最先端で活躍する人たちへのインタビューから、次代の教育のあり方に迫ります。第6回は、スペインのプロサッカーリーグで女性初の監督となり、指導者として活躍している佐伯夕利子氏です。名門クラブチーム・ビジャレアル CF のコーチ時代に、選手一人ひとりの主体性を育む「教えないスキル」でクラブを躍進させた、その指導の考え方や指導者を変えた組織改革についてお聞きしました。

## 子どもが主語となる「教えないスキル」で、自立・自律できる力を育む



公益社団法人 日本プロサッカーリーグ 常勤理事  
ビジャレアルCF 元コーチ

### 佐伯夕利子

**さえき・ゆりこ** 1973年、イラン生まれ。小学校時代を福岡県で過ごし、小学2年生でサッカーを始める。親の転勤で海外を転々とし、日本の高校を卒業後、1992年にスペインへ移住。サッカー指導者の道を読み始める。2003年、スペインの男子リーグ3部で女性初の監督に就任。2008年、ビジャレアルCFと契約、育成部でスペイン代表選手を育てる重要なポストを担う。2010年に女子統括責任者兼トップ監督に就任するなど、クラブを牽引。2018年に公益社団法人日本プロサッカーリーグの特任理事(非常勤)、2020年3月から常勤理事。著書に『教えないスキル ビジャレアルに学ぶ7つの人材育成術』(小学館新書)。

#### キーワード ①

### 「学び」ではなく「学びの機会」を提供

— コーチを務めたスペインのクラブチームでは、大胆な指導改革に取り組みられました。選手にどのような力を育てようとしたのでしょうか。

**佐伯** サッカーは、陸上や水泳などのように能力を数値化して競うのではなく、相手チームより1点でも多く取った方が勝ちとなる競技です。その1点を取るプロセスには、確固たる方式がありません。フィールドに立つ選手が、その時の状況を瞬時に把握し、理解し、局面を打開できる選択肢を挙げ、その中から最適な選択肢を判断し、実行する。この一連のプロセスを、プロの選手は0.8秒間で行うと言われています。そうした競技において試合で勝つために重要な要素は、選手一人ひとりの主体性にほかなりません。

そのことに初めて気づいたのは、スペインチームのコーチ陣と指導改革に向けて議論した時でした。それまでは、選手が自己決定できるようになるためのトレーニングをすることなく、単にサッカーのスキルだけを選手に教え込んでいました。そのことへの問題意識が生まれたのです。

— クラブには小・中学生や高校生の選手も所属していますが、選手が0.8秒間で主体的に判断できるようになるために、どのような指導をしたのですか。

**佐伯** 試合に出るのは選手であり、コーチではありません。主体的で自立・自律した選手となるためには選手自身がサッカーを学ぶことが大切だと考え、「コーチは、選手に学びの機会を創出するファシリテーター」であるべきだと定義しました。「学び」そのものではなく、学びの場やヒント、きっかけといった「学びの機会」を提供する。「学び」

## 『教えないスキル ビジュアルに学ぶ7つの人材育成術』とは？

欧州リーグで優勝したクラブとしても人気が高く、サッカー日本代表の久保建英選手が所属した、スペインのフットボールチーム「ビジャレアル」。ヨーロッパで最も堅実な育成機関と評されている、ビジャレアルのカンテラ（育成組織）で、育成・指導の大改革に携わった佐伯氏の本書には、サッカー（フットボール）の指導のみならず、学校教育の現場でも、置き換えてみれば取り入れることができるメソッドが多い。「教えない」ことで「学びの意欲が増す、成長する」。そのヒントが満載の書である。

佐伯氏は、その「教えないスキル」を7つのキーワード、Reflection（言動への意識）、Question（問いかけ）、Words（パフォーマンスを生む言葉）、Knowing（相手を知る）、Equality（対等な関係）、Centred（自覚している状態）、Cognitive（認知力）で紹介している。



（小学館新書）

は、選手それぞれが感じて得てこそ、自分の力になるからです。

そうした視点で選手へのアプローチをゼロから見直し、選手への話し方や態度が、選手の主体的な学びにつながるかを常に意識しました。コーチの間でよく話したのは、自分が発する言葉で、「選手の頭の中が活性化しているか」をイメージしようということでした。一方的に自分の考えを伝えたり、断定的に言ったりせず、選手が考えることを意識して問いかけるようにしたのです。人は他者から問われると、自然と考えます。ただ、そのプロセスは、問い方によって異なることにも気づきました。コーチ間で、オープンクエスチョンやクローズドクエスチョンなどを勉強しながら、「教えないスキル」を試行錯誤していきました。

### キーワード 2

## 一人ひとりのスペースで学べる環境

—選手が安心して考えを話せる環境づくりも重要になりそうですね。

**佐伯** 特に気をつけたのは、質問に対して的外れな答えが返ってきた場合のコーチ陣の態度です。嫌な顔をしないのはもちろん、その発言を無視して、期待する答えを言いそうな選手に聞き直すようなことがないように意識しました。そうした一つひとつの出来事が、選手が安心して話せなくなる空気をつくってしまうからです。

また、黙っているからといって、「何も考えていない」とか「主体性がない」などと決めつけず、選手と1対1の面談を増やして丁寧に声を聴くようにしました。選手と深く接するうちに、選手に見えている景色は皆、同じではなく、同じ時間で考えられるわけではないことに気づきました。そこで、「選手が必要とするスペースを与えよう」と、コーチの間で話したのです。ここでいうスペースとは、そ



写真 「指導改革によって、自分の指導観が根本から変わった」という佐伯氏。伸ばしたい相手を主語にして、その相手が心地よい学びをつくれるように心がけたという。

れぞれの選手が必要とするタイミングや時間のことです。

それまで、指導の主語は私たち指導者にありました。しかし、主語を選手に置き換え、考えを聴かせてほしいという姿勢が選手に伝わると、選手の誰もが臆することなく、それぞれの意見を発することができる組織になりました。それまで試合前のミーティングでは、22人の選手のうち、いつも同じ3人しか発言していなかったのが、2年後には、22人全員が自分の考えを述べ合うようになっていました。どんな発言にも、しらけた態度を取ったり、からかったりすることがなく、勝利に向けて貪欲に意見を交わす集団に成長していったのです。

—見えている景色がそれぞれ違うということは、一人ひとりの選手を深く理解する必要がありますね。

**佐伯** スペイン全土から集まる中高生の選手は、寮で生活しながら、敷地の隣にある公立中学・高校に通っています。改革前まで私たちコーチは一度もすぐ隣にある学校を訪れたことがありませんでしたが、選手の「生徒」としての側面も知ることが、選手の理解につながるのではないかといった意見がコーチの間から出ました。そこで、学校を定期的に訪れ、選手の学校での様子を先生に聞くようにしました。また逆に、先生をクラブに招待し、寮での生活の様子や、コーチの選手への向き合い方を伝えました。

さらに、インターネット上に学校とクラブの両者がアクセスできる共有フォルダを設けて、選手・生徒一人ひとりのファイルに、その日のトピックを入力し、リアルタイム

で選手・生徒の情報を共有できるようにしました。例えば、今日、学校で友人と口論したという情報をもらえることで、寮でのふてくされた態度にも理解を示すことができます。選手・生徒を1つの側面だけで判断せず、包括的に理解して、成長を支援する体制を築いたのです。

先生もコーチも、目指しているものは同じ、子どもの幸せです。大人の事情や誇りを取り払い、互いに歩み寄ることで、子どもを支える豊かな関係が実現したのだと思います。

### キーワード 3

## アンラーンから始める

— 指導者には大きな変化が求められたと思います。どのように指導改革を進めたのでしょうか。

**佐伯** 改革を推進するために、コーチ育成の専門家や心理学者ら10人の専門スタッフを迎え入れました。そして、約120人のコーチを指導対象の年齢別のグループに分けて、「どのような選手を育てたいのか」「そのために指導者はどうあるべきか」といったことを徹底的に話し合いました。

しかし、それまで意識してこなかった選手への接し方を変えるのは、一筋縄ではいきません。そこで、自分たちの指導を客観的につぶさに振り返ることにしました。練習や試合の時に、コーチ一人ひとりにピンマイクと小型カメラをつけて、コーチの言動を選手がどう受け止めているのかを録画したのです。そして、週1回行う2時間のコーチ・ミーティングでは、数分間ごとに録画を止めながら、互いに気づいたことを指摘し合いました。「今の発言にはどんな意味があったの？」と突っ込んだり、「今の言い方はよかったね」と褒めたりしたのです。

ただ、コーチは一人ひとりが皆、自身の成功体験を基にした指導論を持っています。他者からあれこれ指摘される

のは面白くなく、口論になることもありました。

— 改革は、必ずしも順調ではなかったのです。

**佐伯** 120人もコーチがいれば、改革の趣旨を理解する速さや深さはそれぞれ異なります。コーチとして成長するチャンスだと捉えて前向きに取り組む人もいれば、改革の趣旨が合わずにクラブを去った人もいました。改革サポートの専門スタッフたちも、改革は痛みを伴うものであり、120人全員が同じ方向に納得して進むとは期待していなかったのではないのでしょうか。

ただ振り返ってみると、この改革は、私たち指導者にとっても学びの場であり、指導者が学習者にとってどれほど重要な存在であるかを徹底的に追究できた、画期的な取り組みでした。自分の常識や習慣、指導論が「正しいのか？」とあえて疑問を持ち、いったん手放して、そこで得た気づきや新たな知識を組み立て直す、その繰り返しでした。「ラーン」「アンラーン」「リラーン」の視点(下図)を理解し、アンラーンを実践できた人は、指導者として成長できましたし、人生の大きな財産にもなったと思います。

### キーワード 4

## 記憶に残るのは“理論”よりも“感情”

— ご自身は、改革にどのように向き合ったのでしょうか。

**佐伯** 自分はどちらかといえば、人間的な成長も促す教育的な指導者だと、それまでは自負していました。しかし、録画に映っていた自分は、一方的で断定的な指導者でした。自分では選手の考えを聴こうとして質問していたつもりでしたが、「何で右に出したの?」「どうして走らなかったの?」などと、自分の期待する答えへの誘導尋問になっていたのです。そのため、選手は私の顔色をうかがいながら、私がほしいと思っているだろう言葉を必死に選んで発しており、その様子を見て、衝撃を受けました。

自分の態度が、自立・自律した選手を育てる指導とはかけ離れていることにやっと気づけたのです。そこから内省し、改革に意欲的に取り組めるようになりました。学び直したことが、指導者としての自身の成長につながったと思います。

— ご自身の指導を客観的に捉えて、変えることができたのはなぜだと思いますか。

**佐伯** 学びの主体は選手であると、本当の意味で気づけたからだと思います。ある時、改革サポートの専門スタッフから、「あなたたちは、フットボールの優れた理論を持つ、優秀な指導者かもしれません。しかし、その理論など、時が経てば選手は忘れてしまいます。選手の記憶に残るのは、指導者から受けた感情です。よい思いも悪い思いも、あな

### ● 成長に向けた学びの繰り返し

#### ラーン (Learn、学び)

知識や技能、ノウハウなどを学ぶ。

#### アンラーン (Unlearn、学び壊し)

習慣化している、自分が信じてやまないことにこそあえて「？」マークをつけ、疑ってみる。

#### リラーン (Relearn、学び直し)

学びを壊したことで得た気づき、手放すことで得られた新たな知識を、自分の中で組み立て直す。

※佐伯夕利子著『教えないスキル ビジュアルに学ぶ7つの人材育成術』(小学館新書)、及び取材を基に編集部で作成。

た自身に結びついて記憶に残りますよ」と言われました。

その時、私と接することで選手の中に生まれる感情についてなど、気にも留めていなかったことに気づいたのです。これまで教えてきた何百人もの選手に、「頑張ろう」とか「もっと上手になりたい」といった積極的な感情を持たせることができていたのか——。その反省が大きな痛みとなり、そこから変わっていくことができました。

キーワード 5

## 人としての最上位概念は「リスペクト」

——様々な国で教育を受け、今はスペインを拠点に生活をしているご経験から、日本の教育については、どのように感じていますか。

**佐伯** 私はイラン、台湾、スペイン、日本の学校で学びましたが、もう一度学校に通うとしたら、日本の学校を選びたいですね。人を大切に育ててくれると最も感じましたから。

ただ、スポーツの指導者として気になっているのは、人として生きていく上での最上位概念である「リスペクト」について学べる場面があまり見られないと感じることで。昨今の日本で様々なハラスメントが起きているのは、リスペクトする気持ちはあっても、その前にヒエラルキーが存在し、自分より地位や年齢が低い相手をリスペクトする必要はないという意識がどこかにあるからではないでしょうか。

欧米では、小さな子どもでも他者を傷つけたり、馬鹿にしたりする行為は厳しく注意されるので、「リスペクトは絶対的に不可侵なもの」として、幼い頃から意識づけられています。ですから、もし子どもが大人から、さげすむような言葉を言われたら「私は、あなたにリスペクトを欠いていませんよね？ じゃあ、あなたも私に対してリスペクトを守ってください」とはっきり言えるのです。

日本でも、こういった行為や言葉遣いがリスペクトを侵害するののかという基準を、子どもたちが具体的に理解し、もしそういった行為をされた場合には保護者や教員に伝え



指導者はファシリテーターであり、「学び」そのものではなく、「学びの機会」を提供する存在です

るようにすることが、いじめやハラスメントをなくしていくためには必要なのではないのでしょうか。

——最後に、コロナ禍の収束も見通せていない状況ですが、今後の社会では何が大切になると思いますか。

**佐伯** 現代はVUCA\*の時代と言われていますが、私はこれまでの社会も予測は難しかったと思います。つまり、環境が変わったのではなく、私たちの見方や解釈が変わったのではないかと捉えています。将来への不安は、起こっていないことに対する自分の勝手な解釈から生まれるものであり、まだ何も分からないことに意識を向けてあれこれ思いを巡らせても意味がないと思うのです。

大切なのは、自分や相手が幸せでいられる環境とはどのようなものなのかを常に問い続けながら、今できることに意識を向けて行動していくことです。例えば、より多くの人と交流したり、未知の世界に踏み込んで学びを深めたりしながら、今を着実に生きていくことが、確かな未来を築いていくことにつながるのではないのでしょうか。

### 佐伯氏とウェブ上で対話しませんか

#### From the front-runner

本誌では語り尽くせなかったお話を動画でご視聴いただけます。

#### To the front-runner

佐伯氏へのご質問や、ご意見・ご感想をお寄せください。本コーナーの内容に関するもののほか、著書や海外の教育に関することも大歓迎です。佐伯氏からの回答はウェブサイト上に公開します。

※ご質問内容によっては、公開を控える場合もございます。ご了承ください。

#### Web VIEWn-express もご覧ください

ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト内の『VIEW n-express』コーナーでは、佐伯氏のインタビュー動画をご覧いただけます。佐伯氏へのご質問も受け付けています。

VIEW n-express 検索

右記の2次元コードから動画と質問フォームのページにダイレクトにアクセスできます。▶▶▶



\* Volatility (変動性)、Uncertainty (不確実性)、Complexity (複雑性)、Ambiguity (曖昧性) の頭文字を取った造語。

## 2021 Vol.3 へのご意見・ご感想

このコーナーでは、編集部へ寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

\*本誌のバックナンバーは「ベネッセ教育総合研究所」ウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) でご覧いただけます。

●特集では、最新の教育課題について、大・中・小の自治体規模に合わせて事例が紹介されていたので、自身の自治体と比較しながら、現状を考えることができました。ICT環境や支援体制の情報も参考になりました。(岡山県)

●特集の東北大学大学院・堀田龍也教授の「課題と解決策」を読み、「まず教員自身が、仕事でICTの活用を」という言葉が、自分自身のことを言われているように感じました。タブレット端末を子どもたちは見事に使いこなし、自分と一緒に学んでいる状況です。ICTスキルに自信がないわけではありませんが、技術の進歩が速いため、研修だけでは追いつかないのも現実で、試行錯誤の毎日です。(秋田県)

●特集の神奈川県川崎市の事例で、「かわさきGIGAスクール構想」の内容や推進組織が具体的で参考になりました。同市立田島中学校では、模擬授業形式で研修を行ったり、授業の振り返りを端末で提出させたりすることで、ICT活用が浸透し、授業や業務の改善が進むことが分かりました。ICT活用が日常化していることに驚かされました。(滋賀県)

●特集の山口県周南市立秋月小学校の事例に共感しました。学校の状況にもよりますが、機器の破損や不適切な使用を心配して、多くのルールを設ける傾向があるように思います。「端末を文房具の1つのように」とありましたが、多少の破損や不適切な使い方は想定内として受け入れ、適切に使っている多くの子どもたちに目を向けて活用していきたいと感じました。(神奈川県)

●特集の長崎県川棚町立小串小学校の事例では、ICTの活用方法が具体的に分かりやすく紹介されており、参考になりました。児童の具体的な姿や先生方の思いも、よく伝わってきました。ICTを活用した指導法を学んでいます。新しいことが次々と出てきて、アップデートしていく必要があるのです。こうした事例を参考にしたいと思います。(岐阜県)

●特別企画の大阪府大阪市教育委員会が実践されているように、国際社会で生き抜く力を育むためには、英語教育の強化が必要であり、小学校低学年からの英語教育は喫緊の課題です。今後、ALTの配置や、園・小・中と連続した英語教育の実践を重視していきたいと考えました。(新潟県)

●連載「教育長が語る Leader's View」で富山県砺波市教育委員会・白江勉教育長が語られていた「教員は、子どもと目で意思疎通することを大切にしてほしい」という言葉に共感しました。ICT化がいかに進んでも、教育の根源は人と人とのつながりにあります。目と目が合うことで、心がつながると思います。(北海道)

●連載「データで教育を読む」で紹介されていた、携帯電話やスマホの使用時間と、家庭学習・睡眠時間に関係があることに納得しました。子どもは保護者の姿を見ています。保護者も、子どもの前でスマホを見過ぎることなく、子どもとともにタイムマネジメントをする重要性を感じました。保護者会で資料として提示したいです。(埼玉県)

●連載「フロントランナーに聞く 教育の next」で、障害のある子どもを「学びについての特別な注文の持ち主」とし、よりよい未来の教育を学ぼうとする明蓬館高校の日野公三校長の視点到感銘を受けました。発達障害のある子どもへの支援について悩んでいましたが、ICTを活用して学びの機会を保障し、組織的・計画的に進めようと思います。(福島県)

●東日本大震災の際、教科書は失ったが、デバイスと電気と通信網があったため、クラウドに保存されていた教材やデータで学習が続けられた、と聞いたことがあります。紙の教科書がなくてもタブレット端末が使えれば、災害時でも教育の復旧を早められます。連載「新しい学びのかたち キーワード解説」で取り上げられた「デジタル教科書」は、そうした役割も担えるのではないかと考えました。(大阪府)

## 編集後記

大仙市立大曲小学校の「総合的な学習の時間」取材した、単元最後の授業では、地元の老舗菓子店の店主も参加して、これまでの活動を講評。授業後には、子どもたちが店主の周りに集まり、記念撮影をして別れを惜しんでいました。多様な他者との協働的な学びには、子どもが身近に感じられる仕掛けが効果的だと思います。「地域や食」というテーマで子どもが未来に思いをはせることは、深い学びにつながると実感しました。(広瀬)

## VIEWnext 教育委員会版 2021 Vol.4

2022年3月10日発行/通巻27号

発行人 山河健二  
編集人 春名啓紀  
発行所 (株)ベネッセコーポレーション  
学校カンパニー VIEW next 編集部  
印刷製本 研精堂印刷(株)  
編集協力 (有)ペンダコ  
執筆協力 神田有希子、二宮良太、長谷川教  
撮影協力 竹内洋平、福山 哲  
イラスト協力 齊藤明子

お問い合わせ先  
フリーダイヤル  
0120-350455  
〒700-8686  
岡山市北区南方3-7-17

©Benesse Corporation 2022

※ 2022年度 Vol.1 の発行は、6月を予定しています。

# 新しい 学びのかたち

## キーワード解説

### 今号のキーワード

# 思考ツール (シンキングツール)

**思**考ツール（シンキングツール）は、分類・比較・関係づけ・順序立て・構造化など、物事を批判的、複合的に考える際に、その考えを整理し、視覚的に表現するための道具（ツール）です。最も有名なツールの1つが、イギリスのジョン・ベンという学者が考案したことから名づけられた「ベン図」で、ほかにも動物の形を模したチャート図など、目的に応じて選べる多数の思考ツールがあります（図1）。

学習活動では、個別学習において思考を促す場面と、協働学習において特定の課題や活動について共通理解を図る場面の両方で使われます。「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総合的な学習の時間編」にも、「『考えるための技法』を指導する際には、比較や分類を図や表を使って視覚的に行う、いわゆる思考ツールといったものを活用することが考えられる」と明記されています。「関係づける」「理由づける」「多面的に見る」といった情報処理活動はすべての教科等で行われるため、思考ツールは、様々な学習場面で活用されることが期待されています（図2）。ツールを活用する際は、

- ①何を、どのように考えさせたいのかを意識して、その目的に合ったツールを使うこと
- ②ツールを使って情報を書き出すことで終わらせず、そこから言えることや新たに気づいたことを指導者も学習者も意識していくことの2点に留意すると学習の質が高まります。

**最**近のデジタル教材には、主だった思考ツールが組み込まれており、画面上の思考ツールにテキストを入力できる場合もあります（図3）。協働学習において、互いの考えを共有しやすくなったり、ワークシート作成などにかかる教員の負荷が軽減されたりといったメリットがあるので、ICTの活用とセットで考えるとより効果的です。

図1 思考ツール例

ツール名	見た目	できること	考えるための技法 (思考スキル)
ベン図		共通点と相違点を見つける	比較する
ステップチャート		順序を整理する	順序づける
フィッシュボーン図		事象の要因を探る	構造化する 具体化する 抽象化する
Xチャート、Yチャート、Wチャート		物事を複数の視点から捉える	多面的・多角的に見る 分類する
クラゲチャート		理由を挙げて具体的に示す	理由づける 具体化する 抽象化する
KWLチャート		「知っていること」「知りたいこと」「分かったこと」を整理する	見通す

※ベネッセコーポレーション「探究ナビ」を基に編集部で作成。

図2 中学校の学習指導要領から抽出された思考スキル(頻度順)

順位	国語	社会	数学	理科	4教科合計
1	評価する	多面的に見る	変換する	関係づける	関係づける
2	構造化する	理由づける	理由づける	変化を捉える	理由づける
3	多面的に見る	順序立てる	評価する	理由づける	多面的に見る
4	理由づける	関係づける	多面的に見る	比較する	評価する
5	関係づける	変換する	応用する 抽象化する	抽象化する	比較する 抽象化する

中学校の学習指導要領（国語、社会、数学、理科）で頻出する思考スキルには、「関係づける」「理由づける」「多面的に見る」などがあつた。それらは、小・中学校で大きな違いはない。各教科で思考ツールを活用し、「考えるための技法」を子どもが意識的に使いやすくなることで、思考力等の育成につながる。そのことから、教科横断的なカリキュラム・マネジメントが重要であることが分かる。

注) 教科ごとの延べ抽出数は、国語 99、数学 142、理科 249、社会 124。

※小野塚若菜、渡邊直人、泰山 裕「中学校新学習指導要領における思考スキルの抽出」(2020)を基に編集部で作成。

図3 ICTでの活用例



画面は、ベネッセコーポレーションの授業支援ソフト「ミライシード」での活用例。21種類の思考ツールから目的に応じて選び、背景画像に設定すると、テキスト入力が可能になる。入力した図は、他の端末と容易に共有できるため、協働学習にも効果的。